

なか かみ だ
中神田遺跡Ⅱ

大阪府営寝屋川御幸西第2期住宅建て替え工事に伴う
埋蔵文化財調査概要報告

1998. 3

寝屋川市教育委員会

なか かみ だ

中神田遺跡Ⅱ

大阪府営寝屋川御幸西第2期住宅建て替え工事に伴う
埋蔵文化財調査概要報告

1998. 3

寝屋川市教育委員会



第1調査区 上層遺構



第2調査区 下層遺構

序

中神田遺跡は、大阪府営寝屋川御幸西住宅の建て替え工事に先立って実施した平成5年度の発掘調査で新たに発見された遺跡です。

前回の1次調査では、幅6mにも及ぶ屋敷地を取り囲む大きな堀の跡や、北河内地域では珍しい羽釜を組み合わせて井戸枠とした井戸などの遺構と多くの土器や漆器等の遺物を発見し、当地における14世紀初頭鎌倉時代終わり頃の人々の生活を垣間見る思いがいたしました。

今回の調査では、南の端で前回の調査で発見したものと同様の羽釜を井戸枠とした井戸や、曲物を井戸枠に利用した井戸を発見し、この集落がさらに南へ広がりを見せている事が明らかになりました。さらにこの中世鎌倉時代の生活面の下に、時期は不明ですが堤の様な遺構を発見し、その上に人々は畑を作り生活を営んでいたことも明らかになりました。また、さらに下層から古墳時代中頃の土器も今回の調査で出土しており、今後この地域で古墳時代の生活の跡が発見されることが期待されます。

今回の調査が史跡や埋蔵文化財のみならず全ての文化財に対する理解と認識を深める一助となり、本市の歴史を研究する資料として広く活用して頂けるよう願っています。

最後になりましたが発掘調査から本書の発刊に至るまで多大なご協力を賜りました、大阪府建築部住宅建設課、大阪府教育委員会文化財保護課、地元各位をはじめ関係機関、関係各位、発掘調査・遺物整理に携わって頂いた方々に心より感謝いたします。

今後とも文化財保護に対する御支援・御協力をお願いする次第です。

平成10年3月

寝屋川市教育委員会

教育長 鈴木 隆

例　　言

1. 本書は、寝屋川市御幸西町436番地他に所在する中神田（なかかみだ）遺跡における大阪府営寝屋川御幸西第2期住宅建て替え工事に先立って実施した文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、現地での発掘調査を平成8年8月2日から平成9年3月28日まで実施し、遺物整理を平成9年8月26日から平成10年3月31日まで実施した。
3. 調査に係る費用は、全額を大阪府が負担した。
4. 現地調査及び遺物整理は、寝屋川市教育委員会文化振興課文化財保護係塩山則之が担当した。調査の実施及び遺物整理の実施にあたっては、文化財保護係濱田延充の協力を得たほか、調査事務等については、文化振興課職員の協力を得た。
5. 本書の執筆・写真撮影・編集は塩山が行い、遺物実測・トレースは内業補助員が行った。出土遺物の洗浄・注記・復元・分類等の整理作業は、内業作業員が行った。
6. 現地調査の実施・本書の作成にあたっては、多くの方々のご指導とご教示・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

大阪府建築部住宅建設課・御幸西町自治会・御幸東町自治会・中神田自治会・地元住民各位・瀬川芳則（関西外国語大学）・宇治田和生（財団法人枚方市文化財研究調査会）・野島 稔（四條畷市立歴史民俗資料館）・中井一夫（大阪府教育委員会）・片岡 修（関西外国語大学短期大学）・財団法人枚方市文化財研究調査会・寝屋川市文化財保護審議会委員・寝屋川市市史編纂課

目 次

序

例 言

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査の概要	7
第1節 遺構	7
第2節 遺物	10
第4章 まとめ	15

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図
第2図 周辺遺跡分布図
第3図 基本層序模式図
第4図 井戸1・5断面実測図
第5図 井戸2平面図及び断面実測図
第6図 井戸3平面図及び断面実測図
第7図 井戸4断面実測図
第8図 小堤状遺構断面図

図 版 目 次

巻頭カラー 写真図版

図版1 第1調査区上層遺構航空写真
図版2 第2調査区下層遺構航空写真
図版3 遺構写真（第1調査区上層遺構・上層溝状遺構）
図版4 遺構写真（第1調査区下層堤状遺構）
図版5 遺構写真（第1調査区下層堤状遺構・小堤状遺構）
図版6 遺構写真（第1調査区下層小堤状遺構・小堤状遺構断面）
図版7 遺構写真（第2調査区上層遺構）
図版8 遺構写真（第2調査区井戸1・5）
図版9 遺構写真（第2調査区井戸2・3・4）
図版10 遺構写真（第2調査区井戸2・3）
図版11 遺構写真（第2調査区下層堤状遺構）

図版12 遺構写真（第2調査区下層堤状遺構）

図版13 遺構写真（第2調査区断面）

図版14 出土遺物写真

図版15 出土遺物写真

図版16 出土遺物写真

図版17 出土遺物写真

図版18 出土遺物写真

図版19 出土遺物写真

図版20 上層遺構図

図版21 下層遺構図

図版22 出土遺物実測図(1)

図版23 出土遺物実測図(2)

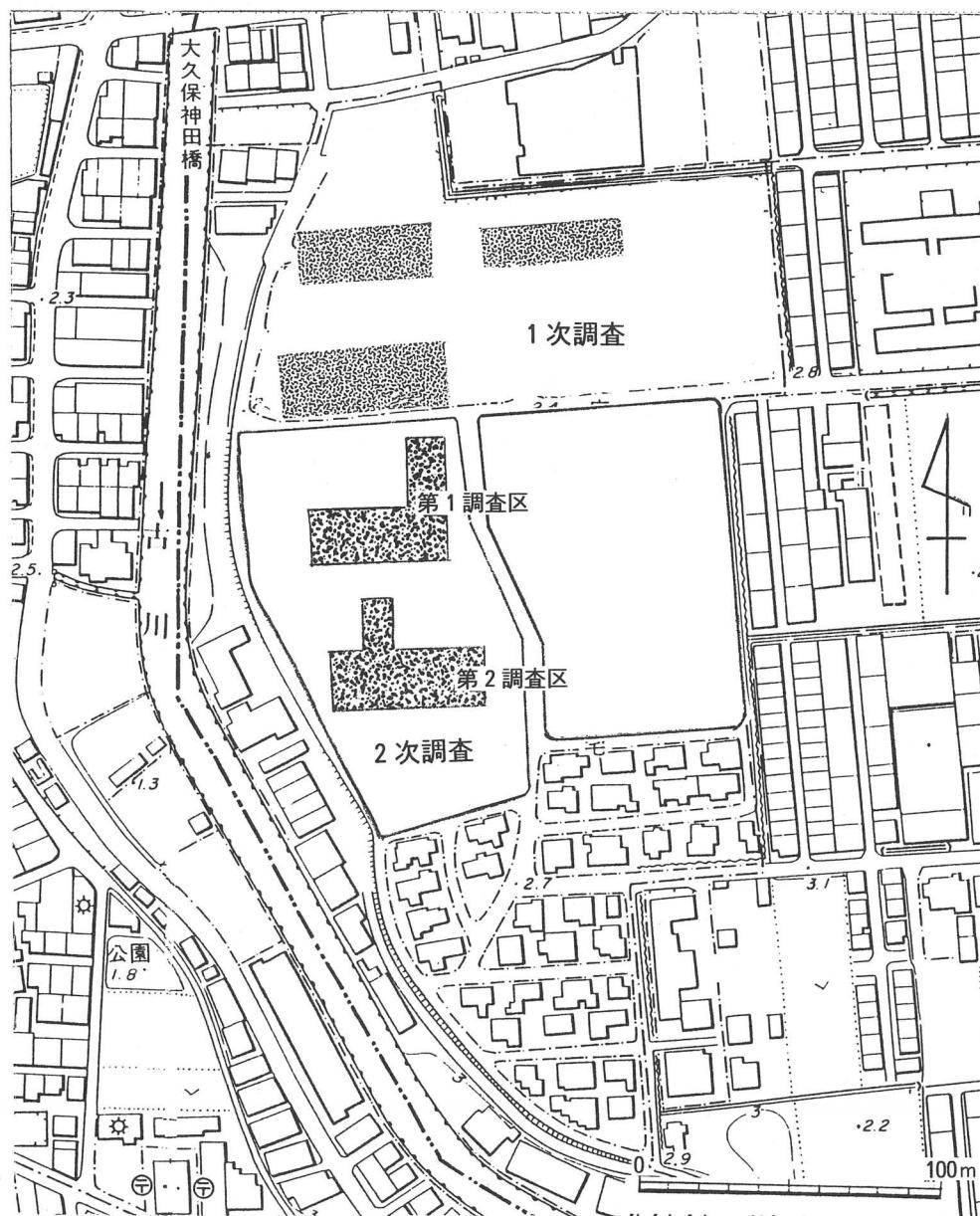
図版24 出土遺物実測図(3)

図版25 出土遺物実測図(4)

第1章 調査に至る経過

大阪府では、昭和40年より大阪府下各地の府営住宅において、老朽化に伴う建て替え事業に着手して来ている。

本市御幸西町一帯に所在する大阪府営寝屋川御幸西住宅は、木造及び簡易耐火構造で昭和35年に建設されたものであり、建築後30年以上を経過し、狭小・老朽化という問題が生じてきた。



第1図 調査地位置図

大阪府営寝屋川御幸西住宅は、平成4年度より建て替えに着手し、以後第3期までにすべての住宅の建て替えが実施される予定で、すでに第1期建て替え工事は終了し、住民の入居も終了している。

平成5年度の第1期住宅建て替え工事に先立つ埋蔵文化財調査（中神田遺跡第1次調査）においては、屋敷地を取り巻く幅6mの堀跡や、幅4mの溝、井戸6基（うち1基は瓦質の羽釜を6段積み重ねて井戸枠としている、1基は木製の井戸枠を有している）や大型土坑、溝、柱穴などを検出した。

それぞれの遺構の内部からは、瓦器碗・瓦器皿・土師皿・羽釜・中国製の白磁・青磁・須恵器の片口の鉢・常滑焼の大甕、滑石製石鍋・温石・砥石等の土器・石器類、下駄・箸状・草履状・曲物・毬・櫛・漆器類の木製品が出土し、13世紀末から14世紀初頭の鎌倉時代の集落遺構の一部であることが判明した。

今回の調査区は、第1期建て替え工事区の南50~100mに位置しており、第2期建て替え工事に先立つ調査で、住宅2棟分と集会所部分・電気室部分について寝屋川市教育委員会が平成8年8月から中神田遺跡の2次調査として発掘調査を実施することとなった。

第2章 遺跡の位置と環境

中神田遺跡は、寝屋川市の西南部に位置し、古川を挟んで西隣の守口市と接している。古川は、蛇行しながら市内の中央を南流し、中神田遺跡の所在するこの辺りで大きく西に湾曲している。中神田遺跡は、古川の左岸に所在している。

中神田遺跡周辺の遺跡の動態を概観してみると、

旧石器時代

北河内地域における旧石器時代の遺跡は、ほとんどが生駒山系の西麓にひろがる枚方市・交野市・寝屋川市・四條畷市・大東市の丘陵部に位置し、20数カ所が知られている。有舌尖頭器・水晶製のナイフ形石器を出土した枚方市樟葉東遺跡、細石器を出土した枚方市藤阪宮山遺跡、有舌尖頭器を出土した交野市神宮寺遺跡、ナイフ形石器から細石刃にいたる各期の遺物を出土した四條畷市更良岡山遺跡、木葉形尖頭器を出土した四條畷市岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した四條畷市南山下遺跡、大東市北条遺跡・宮谷古墳群が知られている。寝屋川市域では、伝寝屋長者屋敷跡・太秦遺跡・高宮遺跡・讚良川遺跡で翼状剥片を利用した国府型ナイフ形石器の出土がみられる。

縄紋時代

北河内地域には土器編年の標識遺跡である早期押型紋の「神宮寺式」の交野市神宮寺遺跡、神宮寺式に後続する「穂谷式」の枚方市穂谷遺跡などの学史上有名な遺跡が知られるもののその数は少数である。

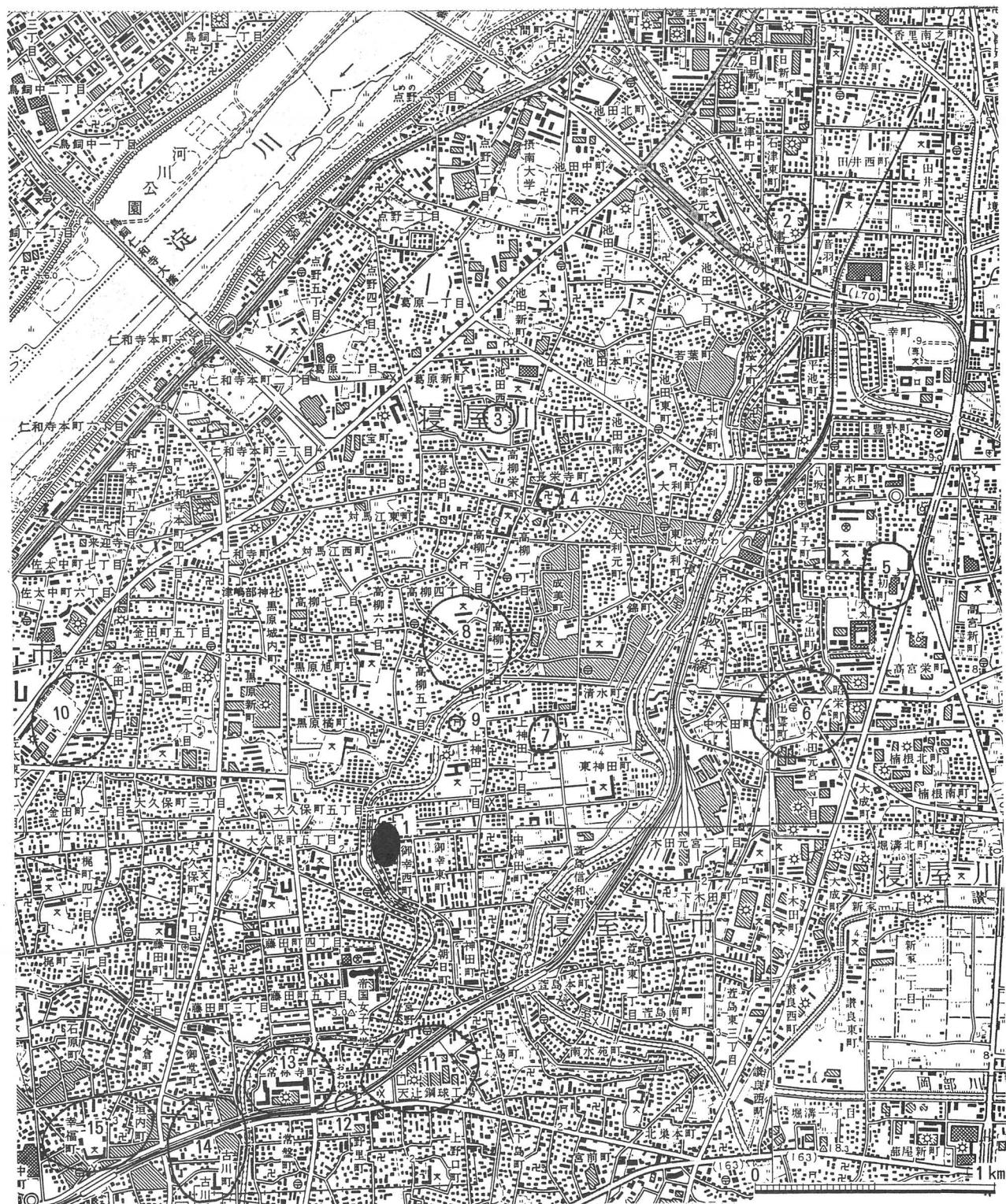
早期では神宮寺式の楕円状押型原体を陰陽逆転して陰刻した押型紋を出土した生駒山中の四條畷市田原遺跡、早期から晩期までの各時期の遺物を出土する淀川の川中に所在する枚方市磯島先遺跡、大東市鍋田川遺跡が知られている。

前期では北白川下層式の土器を出土する枚方市穂谷遺跡、土器の出土はないが出土する石器の特徴から前期に比定されている枚方市津田三ツ池遺跡がある。

中期にはキャリパー式土器を出土する交野市星田旭遺跡、船元式を出土する四條畷市南山下遺跡、砂遺跡、晩期には東北地方の大洞系の土器や埋甕の出土した枚方市交北城ノ山遺跡などが知られている。寝屋川市域では、高宮の海拔28m前後の高宮の丘の上に北白川上層式の土器や石鏃などの石器を出土する前期末に出現する高宮遺跡が最も早く、次に高宮遺跡の南約600mのところに前期末から中期初頭に讚良川遺跡が出現する。讚良川遺跡は、船元式期を最盛期として後期初頭までの間継続して営まれる。遺跡からは、貯蔵穴や土坑などの遺構や、膨大な量の土器・石器等の出土があり、土器は東海地方・北陸地方・東北地方などの他地域のものも多く含まれており、交流の広さを示して縄紋時代中期の近畿地方における拠点集落であったことが明らかになった。また、讚良川遺跡の西約500mのところでは中期前半・後期後半・晩期後半の遺構・遺物を出土した四條畷市砂遺跡が所在している。讚良川遺跡が衰退する後期には、遺跡の上流300mに四條畷市更良岡山遺跡が後期から晩期まで継続して営まれる。小路遺跡からは、後期の土器が出土している。長保寺遺跡（讚良郡条里遺跡）からは、晩期後半の滋賀里Ⅳ式の突帯紋土器が出土しており、共伴の無紋の深鉢には糲圧痕がみられ稻作との関連が注目される。高宮八丁遺跡からは、晩期後半の滋賀里式・船橋式・長原式土器が出土している。高宮八丁遺跡の東約800mに位置する海拔45m前後の太秦の丘に位置する太秦遺跡からは、土器は伴わないけれども石鏃等が採集されている。

弥生時代

最近の調査によって河内潟の北東岸の前期の様相は徐々に明らかになりつつある。前期の遺跡としては、



第2図 周辺遺跡分布図

1. 中神田遺跡
2. 楠遺跡
3. 池田西遺跡
4. 高柳廃寺
5. 高宮八丁遺跡
6. 長保寺遺跡
7. 神田東後遺跡
8. 高柳遺跡
9. 神田天満宮のくすのき(大阪府指定天然記念物)
10. 大庭北遺跡
11. 宮野野口遺跡
12. 大和田遺跡
13. 常称寺遺跡
14. 古川遺跡
15. 普賢寺遺跡

枚方市磯島先遺跡・四條畷市雁屋遺跡・大東市中垣内遺跡・門真市普賢寺遺跡で前期の集落が知られている。寝屋川市域では、前期前葉に高宮八丁遺跡が出現し、中期中葉までつづき、豊富な土器・石器・木器等の出土から河内潟周辺における拠点集落であることが明らかになった。

中期には、枚方市で40数基の方形周溝墓群と多くの竪穴住居跡が発見された交北城ノ山遺跡、古くから近畿地方の代表的な高地性集落として有名な田口山遺跡、天野川を望む丘陵上の星丘西遺跡、四條畷市雁屋遺跡では、中期から後期の方形周溝墓群が営まれるようになり、四脚容器・鳥形木製品・銅鐸の石製舌等も出土している。また、淀川の三角州上に形成された守口市八雲遺跡では玉作り工房跡が発見されている。寝屋川市域では、太秦の丘の上に中期中葉から後期までつづく高地性集落の太秦遺跡が出現し、その位置的関係から前期から中期にかけて営まれた丘陵下の高宮八丁遺跡との関係が伺われる。

後期には、北河内の遺跡は爆発的に増加し枚方市では小型仿製鏡や分銅形土製品を出土した鷹塚山遺跡、六角形の竪穴住居が発見された山之上天堂遺跡、焼失住居が発見された長尾西遺跡、津田城山遺跡、北河内地方で初めて方形周溝墓が発見された茄子作遺跡、後期最終末の墳丘墓が発見された中宮ドンバ遺跡、生駒山系の尾根の頂上付近にあり通信基地的な機能を有する交野市南山遺跡、3口の銅鐸が出土した門真市古川遺跡、手培り形土器の出土した大東市北条遺跡がある。寝屋川市域では、長保寺遺跡・池の瀬遺跡・寝屋遺跡・小路遺跡で土器の出土が知られている。

古墳時代

前期の集落の様相はあまり明瞭ではないが、枚方市の村野遺跡、星丘西遺跡、交野市森遺跡、四條畷市南野米崎遺跡で庄内式土器の出土があり、寝屋川市域では、法復寺遺跡・長保寺遺跡・讚良郡条里遺跡で庄内式土器、讚良川遺跡で布留式（古相）の甕、高宮八丁遺跡で布留式（新相）の甕の出土が知られている。前期の古墳としては、淀川に望み8面の銅鏡が出土し、内6面が三角縁神獸鏡の枚方市万年寺山古墳、画文帶環状乳四神四獸鏡を出土した藤田山古墳、鍋塚をはじめとする数基の前方後円墳からなる交野市森古墳群、妙見山古墳、竪穴式石室を埋葬施設とする全長80mの前方後円墳の四條畷市忍ヶ丘古墳がある。

中期になると、集落としては、枚方市交北城ノ山遺跡、茄子作遺跡、四條畷市の南野米崎遺跡・中野遺跡・馬の祭祀遺構や製塩炉が発見された奈良井遺跡・飾り馬や人物などの多くの装飾埴輪が出土した南山下遺跡・岡山南遺跡が知られている。古墳としては、全長110mの前方後円墳の枚方市禁野車塚古墳（国史跡）、全長107mで一重の周濠を巡らせる前方後円墳の牧野車塚古墳（国史跡）、埴質円筒棺と箱式石棺を内部構造とする円墳の楠葉古墳、短甲形埴輪を出土し方形の周濠を巡らす円墳を含む古墳群の交野市寺・車塚古墳群が知られている。寝屋川市域においては、長保寺遺跡（讚良郡条里遺跡）で、竈をもった竪穴住居や井戸枠に再利用された古代船や扉材が発見されている。法復寺遺跡では、韓式系の陶質土器、楠遺跡では、韓式系土器・初期須恵器・馬齒・製塩土器・素文鏡・倉庫の扉材が発見されている。

後期になると枚方市では石室内が赤色顔料で塗られた白雉塚古墳、横穴式木室の宇山1号墳、交野市の清水谷古墳・倉治古墳群・鍛冶遺構が発見された森遺跡、四條畷市清滝古墳群、大東市宮谷1号墳、城ヶ谷1・2号墳、淀川左岸の低地に位置し、5世紀末から6世紀前半までの3基の古墳が発見されており、その内全長29mの帆立貝形の前方後円墳の周濠から装飾付須恵器壺などや猪・鶏・鹿などの形象埴輪や円筒埴輪が多量に出土した守口市梶古墳、隣接する大庭北遺跡では大溝が発見されている。寝屋川市域では、楠遺跡・池田西遺跡・長保寺遺跡・讚良郡条里遺跡の中期にはじまる集落は引き続き営まれ、長保寺遺跡では、中期のものと同じように井戸枠に再利用された古代船の船体の一部が2カ所、やはり井戸枠に再利用された倉庫の扉財も発見されている。太秦の丘の上には、直径30m高さ6m幅5mの周濠を有する太秦

高塚古墳（市指定）が唯一現存し、中期から後期にかけて太秦古墳群が形成されていた、太秦古墳群では石室に用いられたような石材の報告がないことから、その埋葬施設は木棺直葬によるものと推察される。北河内地方最大の横穴式石室を有する寝屋古墳、江戸時代『河内名所図会』に「八十塚」（やそづか）と紹介された打上古墳群、明光寺門前に建つ「雷神石」と呼ばれている石碑に再利用された凝灰岩製の家形石棺、三味頭遺跡では、周濠内から多くの形象埴輪が出土した墳丘を削平された方墳が発見されている。

終末期には「横口式石槨」を埋葬主体とする石宝殿古墳（国史跡）がある。

飛鳥・奈良時代

枚方市においては、四天王寺の創建期の瓦を焼いた楠葉平野山瓦窯、九頭神廃寺、中山觀音寺、国の特別史跡に指定されている百濟寺跡、高句麗系の軒丸瓦を出土する長宝寺、四條畷市の正法寺、讚良寺、上清滝遺跡では火葬墓が発見されている。寝屋川市域では、高宮の丘の上に出現する高宮遺跡は、豪族の居宅と推察される大型掘立柱建物数棟と柵列によって形成された集落が発見されており、高宮遺跡は東に隣接する白鳳時代創建の高宮廃寺跡（国史跡）と密接な関係にある。奈良時代後半の掘立柱建物数棟が発見された長保寺遺跡、茨田郡の郡寺に推定されている高柳廃寺からは凝灰岩製の蔵骨器（市指定）が昭和14年（1939）に出土している。

平安時代

枚方市の瓦器の生産地として有名な楠葉東遺跡、四條畷市の上清滝遺跡では「寿永三年」の墨書銘のある千体仏、「大庭庄」に比定される守口市大庭北遺跡、一面に灰の詰まった土坑が発見された門真市橋波口遺跡がある。寝屋川市域では、高宮遺跡で「保延六年」（1140）の墨書銘のある曲物桶が井戸の中から出土している。石製の帶飾り・綠釉・灰釉陶器・地鎮祭土器が出土し、前期から中期の集落であることが明らかになった古川上流で「高柳庄」の一部と推定される高柳遺跡、高柳遺跡のすぐ南東に位置する神田東後遺跡も中期の集落であり、多くのは柱穴や綠釉・灰釉陶器・黒色土器が出土している。

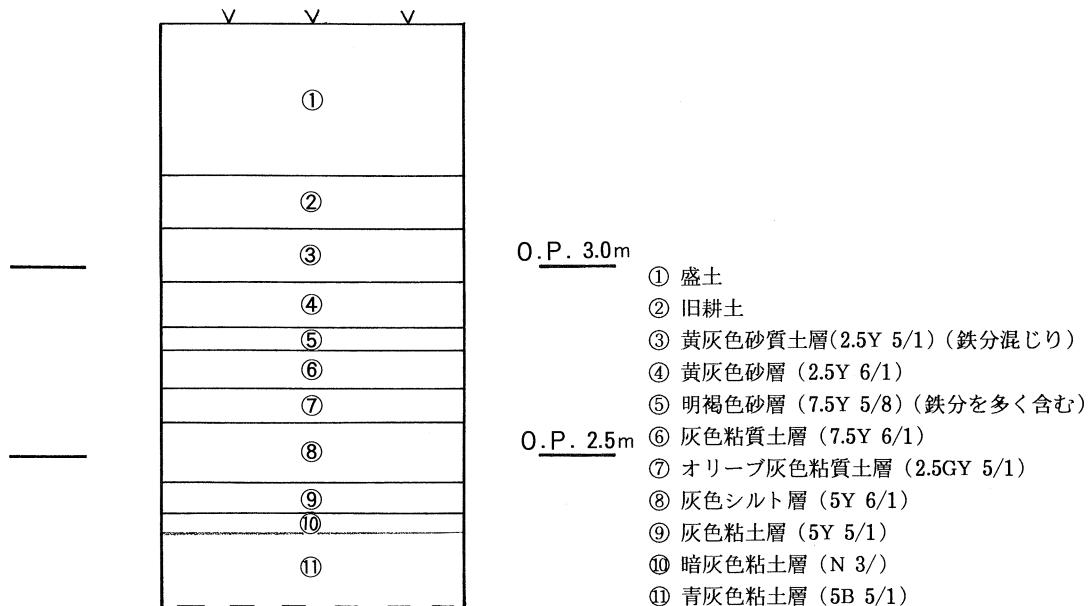
鎌倉時代

枚方市の楠葉野田遺跡、石組井戸が多く発見された四條畷市忍ヶ岡駅前遺跡・中野遺跡、鎌倉時代末の瓦器焼成窯が発見された上清滝遺跡、大東市の北新町遺跡、門真市普賢寺遺跡では絵馬や柿経など寺院跡関連の遺物が発見されている。寝屋川市域では、長保寺遺跡において屋敷跡を取り囲む堀や井戸・柱穴が発見されている。中神田遺跡の1次調査で屋敷跡を取り囲む堀や羽釜の井戸枠、溝などが発見されている。

第3章 調査の概要

調査区は、北側を第1調査区、南側を第2調査区として調査を実施した。

調査区における基本層序は、上層から盛土・旧耕土・黄灰色砂質土層・黄灰色砂層・明褐色砂層・灰色粘質土層・オリーブ灰色粘質土層・灰色シルト層・灰色粘土層・暗灰色粘土層・青灰色粘土層（第3図）となっており、上下2面の遺構面を検出した。



第3図 基本層序模式図

第1節 遺構

第1遺構面（上面）は、灰色粘質土層を地山とし、現在の地表面から約0.8m前後掘り下げた海拔2.8m前後のところで、溝・土坑・井戸・落ち込み等を検出した。

1. 井戸

第2調査区からのみ5基の井戸を検出した。第1調査区からは検出していない。

井戸1（第4図・図版8）

調査区の東端で検出した。上面の掘り形は直径1m、検出面から底部までの深さは0.5m、底径0.5mを測る。内部には、中央に直径40cm前後、高さ30cm前後の土師質の羽釜の底部を打ち欠いて5段積み重ねて井戸枠としたものを検出した。羽釜の累積方法は、下から全て正立させて重ねている。羽釜5段の深さは、0.8mを測り、上から2段目以上は地上に露出していたものとみられる。井戸枠に使用されている土師質の羽釜（1～5）は、体部が半球形に近く、口径と器高がほぼ等しく、内傾する口縁部を有し、頸部に幅の狭い鐸を巡らせている。

羽釜の外面には煤の付着が著しく、日常使用していたものの底部を打ち欠いて井戸枠として再利用したことがみてとれる。

井戸枠内外からは、瓦器碗・土師皿等の小片が出土している。

井戸 5 (第4図・図版8)

井戸1の東側に隣接して検出された。上面の掘り形は直径1.9mで内部は三段に掘られており、その中央に直径約40cmの曲物を井戸枠としたものが二段残されていた。検出面から曲物の下の底部までの深さは0.9mを測る。曲物の井戸枠は、ほぼ同じ大きさのものが二段(0.55m)残されていたが、本来は数段さらに上に出ていたものと推察される。曲物は、杉材を使用し桜の樹皮で縛綴している。上の曲物の側板の一部は破損し、穴が開いていたが、薄い杉材で穴を埋め補修して使用していた。また、底板も曲物の横に沿わせるようにして立てかけられていた。

二段残されていた曲物の井戸枠の下は素掘りとなっていたり、底径0.3m、深さ0.4mを測る。

井戸枠内外からは、瓦器碗・土師皿等の小片が出土している。

井戸1・5は、その切り合い関係から井戸1が先に掘られたことが明らかであるが、内部から出土する遺物には時期差は殆どみられない。

井戸2・3・4は、調査区の西端で検出し、井戸2と井戸3はほとんど接するようにして検出された。

井戸 2 (第5図・図版9・10)

上面の掘り形は1.2m×1mの橢円形で、底部は0.6m×0.4m、検出面から底までの深さは1mで内部には井戸枠は残っていなかった。

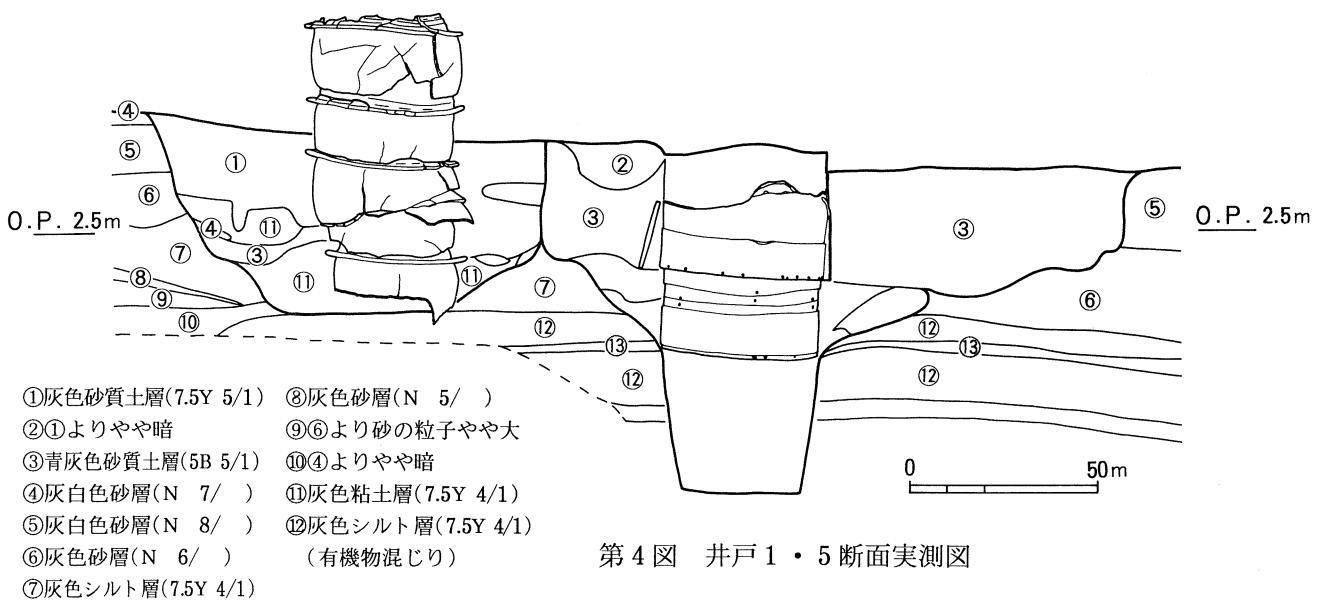
井戸 3 (第6図・図版9・10)

上面の掘り形は1.3m×1mの隅丸方形で、底部は0.6m×0.5m、検出面から底までの深さ1mで内部には井戸枠は残っていなかった。

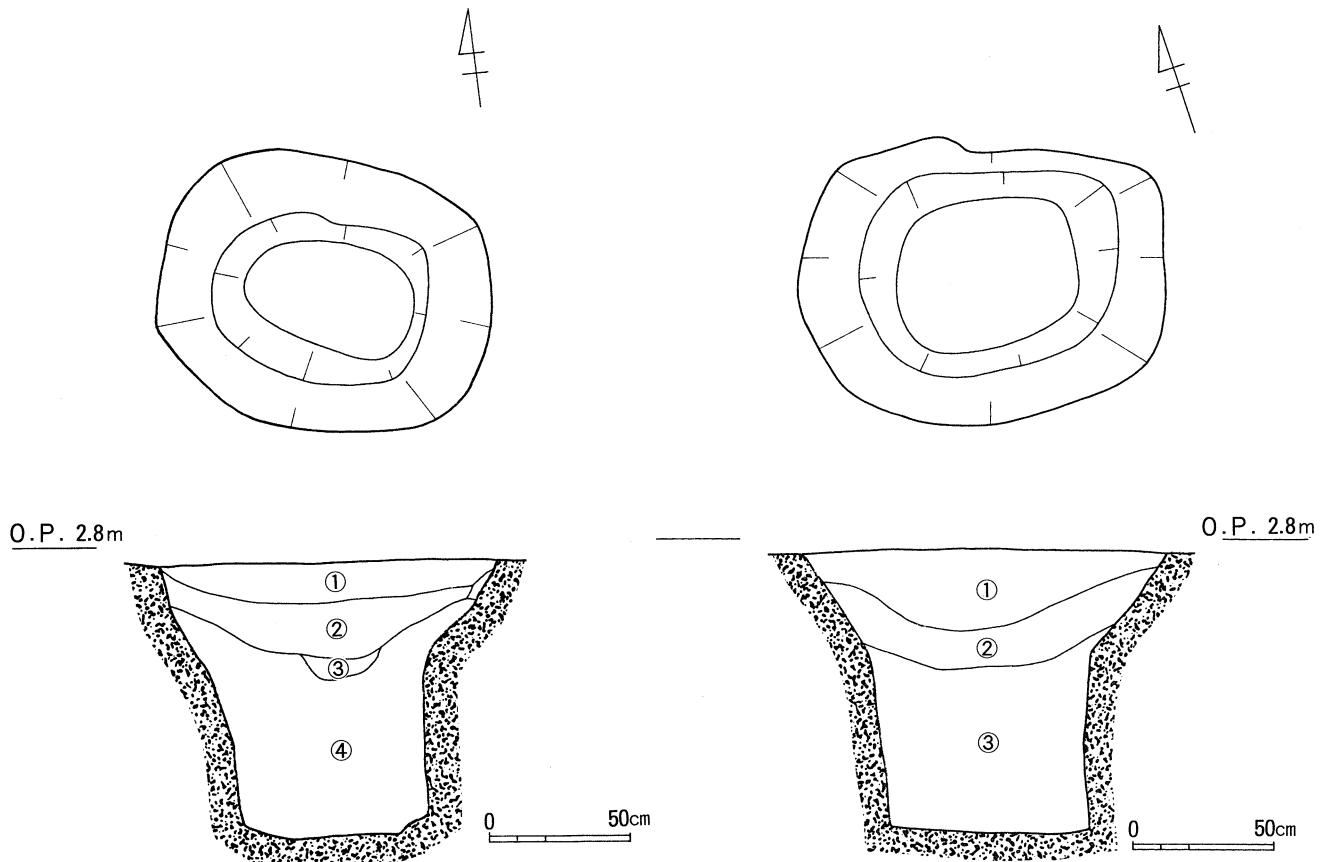
井戸 4 (第7図・図版4)

直径0.7m、深さ0.5mで内部にはやはり井戸枠は残っていなかった。また、内部からは何ら遺物も出土していない。

井戸1～3・5は、その内部から出土する遺物から13世紀中頃から14世紀初頭のものである。



第4図 井戸1・5断面実測図



①オリーブ灰色砂質土層(2.5GY 6/1)

②灰色シルト層(N 6/)

(同色粘質土層がブロック状に混じる)

③灰色粘質土層(N 5/)

④灰色粘質土層(N 4/)

①灰黄色砂層(2.5GY 6/2)

(黄橙色砂層(10YR 7/8)混じり)

②灰色シルト層(N 6/)

(同色粘質土層がブロック状に混じる)

③灰色粘質土層(N 4/)

(同色砂層がブロック状に混じる)

第5図 井戸2平面図及び断面実測図

第6図 井戸3平面図及び断面実測図



第7図 井戸4断面実測図

①灰色白砂層(10YR 7/1)に褐色砂層(7.5YR 4/6)混じる

②灰色砂層(10YR 7/1)

③灰白色砂層(5Y 6/1)に明黄褐色砂層(10YR 6/8)混じる

④灰色砂層(N 6/)

⑤灰色粘質土層(N 5/)

⑥明黄褐色砂層(10YR 6/8)

第2遺構面（下面）は、現在の地表面から約1～1.2m掘り下げた海拔2.3m前後のところで、堤状遺構を検出した。堤状遺構の上面は、暗灰色粘土層が全域を覆っている。

2. 堤状

第1調査区の東半分と第2調査区の西端で検出した。第1調査区の堤状遺構は上幅15m、下幅17m、高さ0.4mで全体の長さは調査区域外にさらに延びているため不明である。方向は、磁北に対して約45度程度北東から南西方向に角度を振っている。

幅15mの堤状遺構の上面では、数十条の畑の畝の溝がみられ、部分的に僅かではあるが、畑状の高まりも認められる。

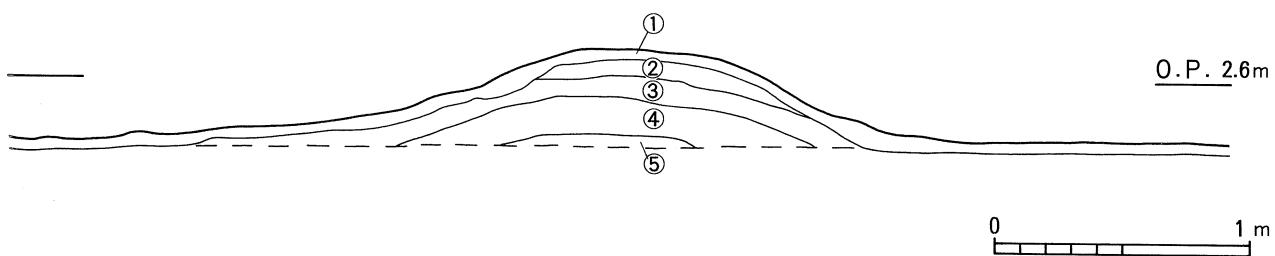
第2調査区の堤状遺構の上幅は15m、下幅は17m、高さは0.4mを測り、第1調査区のものとほぼ同規模で、方向も磁北に対して約45度程度北東から南西方向に角度を振っている。全長については、そのほとんどが調査区域外に延びているため不明であるが、第1調査区と第2調査区の堤状遺構は方向や規模がほぼ一致していることから一連のものと推察され、50m以上を測るものと推測される。

幅15mの堤状遺構の上面では、第1調査区と同様に数条の畑の畝の溝がみられ、部分的には僅かではあるが、第1調査区の堤状遺構と同様な畑状のたかまりも認められる。

第2調査区の堤状遺構の東側は、一面に数次に亘る東から西方向への砂層の堆積がみられ、東端では最高約1m堆積している。しかし、堤状遺構の西側では、砂層の堆積はまったくみられない。

さらに、第1調査区の堤状遺構の西約8mのところで、第1調査区の堤状遺構に平行に、方向を同一にする小堤状遺構を検出した。小堤状遺構は、上幅1m、下幅3m、高さ0.6mで全体の規模については、調査区域外に延びているため不明であるが、30m以上あるものと推測される。一部では、二股に分かれている箇所もみうけられる。

これら大小の堤状遺構からは、共伴遺物がなく時期を決定することはできない。



第8図 小堤状遺構断面図

- ①暗灰色粘土層(N 3/)
- ②青灰色シルト層(5B 6/1)
- ③青灰色シルト層(5B 5/1)
- ④暗青灰色砂質土層(5B 4/1)
- ⑤灰色シルト層(5Y 5/1)

第2節 遺 物

今回の調査での遺物は、遺物包含層と井戸・溝・落ち込みからの出土である。遺物の種類としては、瓦器碗・瓦器皿・土師皿・羽釜・白磁碗・青磁碗・青磁皿・鉢・温石・曲物等がある。

羽釜（1～14）

(1～5)は、井戸1で5段に積み重ねて井戸枠として利用されていた土師質のものである。上から1段目(1)、2段目(2)、3段目(3)、4段目(4)、5段目(5)の順であり、正立に累積して使用されていた。全て土師質のものである。

(1)は、口径27.6cm、残存器高20.3cmを測り、球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.2cmの狭い鍔をやや上向きに付している。口縁端部は、平坦面となる。口縁部外面は、端部から1.8cmの所でやや段となっている。口縁部は内面端部から体部外面はヨコナデ調整を施している。口縁部内面及び体部内面上位は、ヨコハケ調整、体部下半はナデ調整を施している。体部外面はナデ調整を施している。(2)は、口径30.3cm、残存器高20.5cmを測り、鍋形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.8cmの狭い鍔を水平よりもやや下向きに付している。口縁端部は、丸く仕上げている。口縁端部内面から鍔の下までヨコナデ調整、内面は、口縁部から体部上半までヨコ及びナナメ方向のハケ調整、外側体部は不明瞭ではあるが、ナナメ方向のハケ調整が施されている。(3)は、口径28cm、残存器高20.7cmを測り、球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.5cmの狭い鍔をほぼ水平に付している。口縁端部は、四角く仕上げ、外面は端部から1.5cmの所でやや段となっている。口縁部内面端部から外面及び鍔の下1.5cmの所までヨコナデ調整、内面は口縁部から体部の底部付近までヨコハケ調整、底部付近はナデ調整を施している。外側体部上半は、タテ・ヨコ・ナナメの乱方向のハケ調整、下半はナナメ方向のハケ調整を施している。(4)は、口径28.6cm、残存器高20cmを測り、球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.5cmの狭い鍔を水平に付している。口縁部内面及び体部内面上位はヨコハケ調整、口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。(5)は、口径28.6cm、残存器高19cmを測り、球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.4cmの狭い鍔を水平に付している。口縁端部は、平坦面となっている。口縁部外面及び鍔の下までヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。内面は、口縁部から2cmの所までは平坦面となっており、ヨコハケ調整の後ナデ調整を施し、以下口縁部から体部下半まではヨコハケ調整を施している。(6)は、土師質で、口径29cm、残存器高26cmを測り、口径が器高を上回っている。球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.4cmの狭い鍔をやや上向きに付している。口縁端部は丸く仕上げられている。口縁端部内面上1cmの所から、外側鍔の下面までヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。内面は、口縁部及び体部はヨコハケ調整、底部付近はナデ調整を施している。口縁部には、6cmの間隔で2箇所1組の丸く打ち欠かれた箇所が対になってある。落ち込み5からの出土である。(7)は、土師質で、復元口径26.5cm、残存器高26cmを測り、球形に近い体部と内傾する口縁部とからなり、肩部には幅2.5cmの狭い鍔をやや上向きに付している。口縁端部は、内傾するやや凹面の平坦面となっている。口縁部外面は、端部から約2cmの所でやや段となっている。口縁部外面は、鍔の下までヨコナデ調整を施し、体部は煤の付着が著しく調整は不明である。内面は、口縁部から体部までナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。(8)は、土師質で、復元口径31.2cm、残存器高6cmの口縁部と鍔部及び体部の一部の残存である。鍔は幅2.8cmの狭いもので水平に付している。口縁端部は、内傾するやや凹面の平坦面となっている。口縁部及び鍔部はヨコナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。(9)は、土師質で、復元口径27.6cm、残存器高8.7cmを測り、口縁部はまっすぐにナナメ内方に延びる。口縁部から体部上半の残存である。鍔は、幅1.5cmの狭いものでほぼ水平に付している。口縁端部は、四角く平坦面となっている。口縁部及び体部の内外面ともにヨコナデ調整を施している。一部鍔の下に接合痕がみられる。落ち込み5からの出土

である。(10) は、土師質で、復元口径25.8cm、残存器高9.6cmを測り、やや内傾する口縁部を有している。口縁部から体部上半の残存である。鍔は、幅2cmの狭いものを水平よりもやや上向きに付している。口縁端部は、四角く凹面のある平坦面となっている。外面は、口縁部から鍔の下までヨコナデ調整、体部は不明瞭であるが、タテハケ調整を施している。内面は、口縁部から体部にかけてヨコ及びナナメ方向のハケ調整を施している。鍔の上面にまで煤の付着がみられる。落ち込み5からの出土である。(11) は、瓦質で、残存器高5.9cmを測り、内傾する口縁部を有している口縁部から体部下半の残存である。鍔は、幅1cmの狭いものを上向きに付している。口縁端部は、内傾する平坦な面となっている。鍔の下端は、体部との接合痕が明瞭にみられる。鍔の下面から体部にかけて煤の付着が著しく調整は不明瞭であるが、ヨコナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。(12) は、瓦質で、復元口径17cm、残存器高10.4cmを測り、内傾する口縁部を有している口縁部から体部下半の残存である。鍔は、幅0.9cmの狭いものを水平に付している。鍔の先端は、丸みを有している。口縁端部は、平坦な面となっている。鍔の下端は、体部との接合痕が明瞭にみられる。鍔の下面から体部にかけて煤の付着が著しく調整は不明である。口縁部外面及び内面、体部内面はヨコナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。(13) は、瓦質で、復元口径17.5cm、残存器高6.2cmを測り、やや内傾する口縁部を有している。口縁部から体部上半の残存である。鍔は、幅0.9cmの狭いものを水平に付している。口縁端部は、やや角張っており、鍔の先端も尖り気味である。鍔の下面から体部にかけて煤の付着が著しく調整は不明である。口縁部外面及び鍔上面はヨコナデ調整、内面は口縁部から体部上半にかけてヨコナデ調整を施している。井戸2からの出土である。(14) は、瓦質で、復元口径18.6cm、残存器高7.1cmを測り、内傾する口縁部を有している口縁部から体部下半の残存である。鍔は、幅0.8cmの狭いものを水平に付している。口縁端部は、内傾する平坦な面となっている。外面の鍔から体部上半にかけて炭素の吸着がよくない。口縁部外面及び体部内面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。

青磁皿

(21) は、復元口径9.9cm、器高2.5cm、底径3.6cmを測る。体部中位で屈曲し、口縁部は上外方にまっすぐに引き出されている。全面に施釉した後、外面底部は焼成前に釉をカキ取っている。内面見込みは、不明瞭であるが、片彫りの花文を有している。龍泉窯系。

鉢(22・23)

(22) は、復元口径29.6cm、器高10.6cm、底径10.4cmを測る。体部は、低く平らな底部からやや内彎気味に斜め上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部外面は、ほぼ垂直をなし、平坦な面を有し、その下をわずかに肥厚させている。底部の切り離しは、回転糸切りである。口縁部外面は、幅1.5cmで、自然釉の付着がみられる。内外面とも調整は不明瞭であるが、ヨコナデ調整を施している。(23) は、復元口径29cm、残存器高10.2cmを測る。体部は、やや内彎気味に斜め上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部外面は、垂直をなし平坦な面を有しており、口縁端部の上は肥厚させている。内外面ともヨコナデ調整を施している。落ち込み5からの出土である。

2点とも東播系の須恵器の片口鉢である。

土師皿(16~20)

(16) は、復元口径8cm、器高1.3cmを測るものである。体部は、平坦な底部から内彎して立ち上がる。口縁部は横ナデ、他はナデを施している。第2調査区の包含層からの出土である。(17) は、口径7.2cm、器高0.7cmを測るものである。底部やや中央が凹んでおり、体部は短く内彎して立ち上がる。口縁部は内

外面とも横ナデ、他はナデを施している。井戸 1 からの出土である。(18) は、復元口径10.2cm、器高1.9cmを測るものである。平坦な底部から外反してたちあがり、口縁部はやや肥厚させている。口縁部は横ナデを、他はナデを施している。第 2 調査区の包含層からの出土である。(19) は、口径12cm、残存器高2.4cmを測るものである。丸みをもつ底部からゆるやかに内彎して立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は横ナデを施している。落ち込み 5 からの出土である。(20) は、口径14.7cm、残存器高2.4cmを測るものである。体部は、平坦な底部から内彎して立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部は横ナデ、他はナデを施している。第 2 調査区の包含層からの出土である。

瓦器椀 (24~38)

見込みの暗文は、連結輪状のもの (24・28~32・36) と不明のもの (25~27・33~35・37・38) がある。

(24) は、口径14.5cm、器高5.8cm、高台径4.7cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面の口縁部に粗いヘラミガキがみられる。口唇部には段を持つ。高台は、逆三角形の高さ 5mm 程度のものである。落ち込み 5 からの出土である。(25) は、口径13.8cm、器高4.7cm、高台径5.6cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面の口縁部に粗いヘラミガキがみられる。口唇部には段をもつ。高台は、逆台形の高さ 3mm 程度の低いものである。落ち込み 5 からの出土である。(26) は、口径13.4cm、器高4.5cm、高台径4.2cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキは不明である。口唇部には段をもつ。高台は、逆台形の高さ 2mm 程度の低いものである。落ち込み 5 からの出土である。(27) は、口径16cm、残存器高4.3cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。口唇部には段をもつ。落ち込み 5 からの出土である。(28) は、口径13.4cm、器高5.1cm、高台径5.7cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。口唇部には明瞭な沈線を有する。高台は、逆台形の高さ 5mm 程度のものである。落ち込み 5 からの出土である。(29) は、口径13.4cm、器高4.5cm、高台径4.8cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。口唇部には段を持つ。高台は、逆三角形の高さ 5mm 程度のものであり、外面の面がほぼ垂直となる。落ち込み 5 からの出土である。(30) は、口径14.7cm、器高4.2cm、高台径5.2cmを測り、器形はいびつである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。口唇部には段を持つ。高台は、逆三角形の高さ 3mm 程度の低いものであり、外面の面がほぼ垂直となる。落ち込み 5 からの出土である。(31) は、口径15cm、器高4.5cm、高台径5.1cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。高台は、逆三角形の高さ 5mm 程度のものである。落ち込み 5 からの出土である。(32) は、口径14cm、器高4.4cm、高台径5.8cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。高台は、逆三角形の高さ 6mm 程度のものである。落ち込み 5 からの出土である。(33) は、口径14.8cm、器高3.9cm、高台径4.8cmを測るものである。内面のヘラミガキはほとんど省略されるほど粗く、外面のヘラミガキはない。高台は、逆台形の高さ 4mm 程度のものである。落ち込み 5 からの出土である。(34) は、口径14cm、器高 5 cm、高台径6.1cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキはない。口唇部には段をもつ。高台は、逆三角形の高さ 3mm 程度の低いものである。井戸 5 からの出土である。(35) は、口径12.6cm、器高4.8cm、高台径 5 mm を測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面のヘラミガキは不明である。口唇部には明瞭な沈線を有する。高台は、逆三角形の高さ 4mm 程度のものであり、外面の面がほぼ垂直となる。高台よりも底部が突出している。落ち込み 1 からの出土である。(36) は、口径14.6cm、器高4.4cm、高台径4.5cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗く、外面の口縁部にヘラミガキがわずかにみられる。口唇部には段を持つ。高台は、逆三角形の高さ 4mm 程度の低いもので、粘土をナデつけた雑なものである。第 2 調

査区の包含層からの出土である。(37)は、口径14cm、残存器高4.1cmを測るものである。内面外面の調整は不明である。口唇部には段をもつ。第2調査区の包含層からの出土である。(38)は、口径13.6cm、残存器高4cmを測るものである。内面のヘラミガキは粗い。外面のヘラミガキは不明である。口唇部には明瞭な沈線を有する。第2調査区の包含層からの出土である。

瓦器皿

(15)は、復元口径8cm、器高1.6cmを測るものである。底部から体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや屈曲しておわる。内面と外面底部は炭素の吸着がわるい。落ち込み5からの出土である。

須恵器(39~43)・土師器(44)は、第1調査区の堤状遺構の下層からの出土である。

杯身(39~41)

(39)は、復元口径9.2cm、残存器高4cmを測る。たちあがりは、直立気味に立ち上がっており、その端部は平坦面をなしている。(40)は、復元口径11.4cm、器高4.4cmを測る。たちあがりは、内傾気味に立ち上がっており、その端部は内傾する明瞭な段をなしている。底外面は、回転ヘラ削り調整を施している。(41)は、復元口径11cm、器高2.6cmを測る。たちあがりは、内傾気味に立ち上がっており、その端部は内傾する明瞭な段をなしている。

壺(42)

復元口径13.5cmを測る頸部から口縁部の残存である。口縁部は、外反して立ち上がり、その端部は外傾する面となっている。口縁部外面には、端部から少し下がった所に1条の凸帯を巡らせている。

高杯(43)

脚部の残存である。「ハ」の字形にゆるやかに外反し、端部で外方に屈曲させ、さらに下方へカギ形に曲げている。

土師器

椀(44)

復元口径13.8cm、残存器高5.5cmを測る。丸い体部から短い口縁部が外反して延びる。

第4章　まとめ

今回の調査では、第1調査区・第2調査区の両調査区を通じて上下2面の遺構面を確認し、以下のことが明らかになった。

第1遺構面

第1調査区では、ほぼ全域に亘って遺構がほとんど検出されていなく、西端において小溝が数条や土坑が数箇所等が検出されたのみである。

第2調査区は、全域に不明瞭ではあるが鋤の耕作跡がみられ、畑地として利用されていたことが明らかとなった。

東南端で検出した2基の井戸は、東からの砂層の堆積層上に掘られていた。これらの内、井戸1の羽釜を井戸枠として利用した井戸は、平成5年度（1993）の1次調査においても1箇所検出されており、2例目の検出である。前回の調査で検出した井戸の井戸枠の羽釜は6段とも瓦質のものであり、今回の調査で検出した羽釜の井戸枠は、前回のものとは異なり5段ともすべて土師質のものであった。

第1調査区については、遺物の出土が少なく時期の決定が困難ではあるが、層位や第2調査区との関連から13世紀中頃から13世紀末までの時期があてられる。花粉分析の結果、水田として永く利用されていたことが明らかとなった。

第2調査区については、井戸枠に使用されていた羽釜や、井戸内部・落ち込み等からの出土遺物から13世紀中頃から13世紀末までの時期があてられる。

東南端と西端で検出された5基の井戸の存在は、中神田遺跡における集落がさらに南へ広がりをもっていることを示唆するものである。また、南に広がるであろうと推定される集落は、1次調査の集落の時期よりも1段階古いものであり集落の形成過程を知る上においても貴重な資料を提供することとなった。

遺物の面では、出土遺物が少なく詳細な分析はできないけれども、瓦器についてみると、大和型が主流を占めているのは1次調査における状況と同じであるが、少量ではあるが、和泉型及び楠葉型の出土がともにみられ、その共伴関係が注目される。

第2遺構面

第1遺構面のほぼ直下で検出された堤状遺構は、暗灰色粘土層が調査区全域を覆っている。堤状遺構に伴う遺物はもちろん、第1遺構面と第2遺構面との間の層においても出土遺物がなく、したがって第2遺構面でのこれら堤状及び小堤状遺構の時期を決定するにはいたっていないけれども、第1遺構面の鎌倉時代よりもさほど古い時期ではないと推察される。

堤状遺構の上面にみられる、畑状の遺構の検出は中神田遺跡における農耕生産の新たな様相を明らかにすることができた。

また、第2調査区でみられたような、堤状遺構の東側に存在する砂層の堆積は、数回の洪水に伴う堆積とみられ、旧の古川にともなうものと推察され、現在は遺跡の西を流路としている古川は、かつては本遺跡の東側を流路としていたと思われる。

その他

堤状遺構の下層から出土した須恵器等は、遺構を伴っていないものの、当地域及びその周辺での6世紀代の遺跡の存在を示唆するものである。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかかみだいいせき II							
書名	中神田遺跡 II							
副書名	大阪府営寝屋川御幸西第2期住宅建て替え工事に伴う							
卷次								
シリーズ名	寝屋川市文化財資料							
シリーズ番号	23							
編著者名	塩山規之							
編集機関	寝屋川市教育委員会							
所在地	〒572-0043 大阪府寝屋川市錦町8番13号 TEL 0720-24-1181							
発行年月日	1998年(平成10年) 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかかみだいいせき 中神田遺跡	おおさかふ 大阪府 ねやがわし 寝屋川市 みゆきにしまち 御幸西町 436番地他	市町村	遺跡番号	34°C 45分 00秒	135°C 36分 50秒	1998年 8月 2日 1998年 3月 28日	2.587 m ²	大阪府営住宅 建て替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中神田遺跡	集落跡	古墳時代 中世以前 鎌倉時代	堤状 井戸、溝、土坑 落ち込み	須恵器、土師器 瓦器、土師器 曲物	堤状の上面で畑			

図 版



第1調査区 上層遺構（左が北）

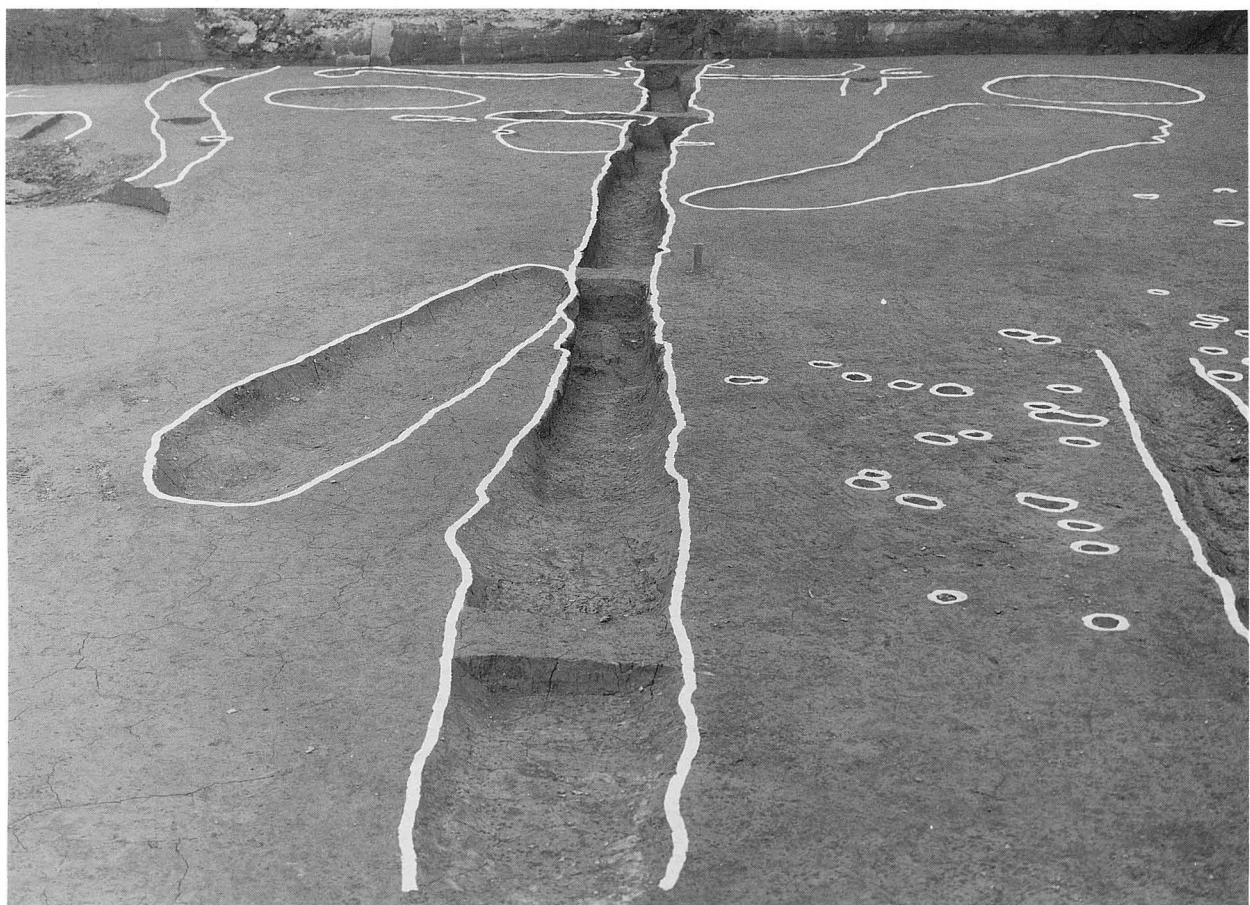
図版2 第2調査区航空写真



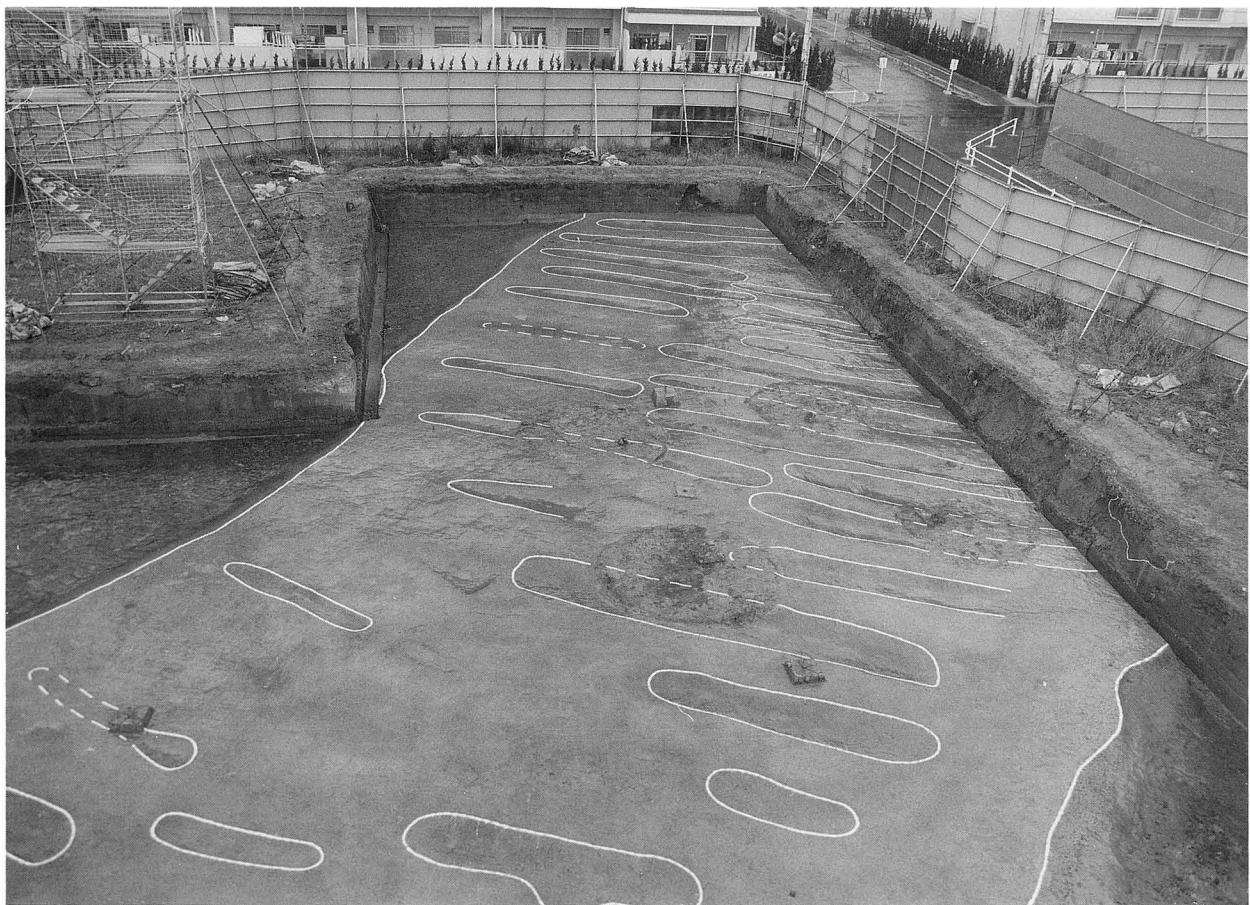
第2調査区 下層遺構（左が北）



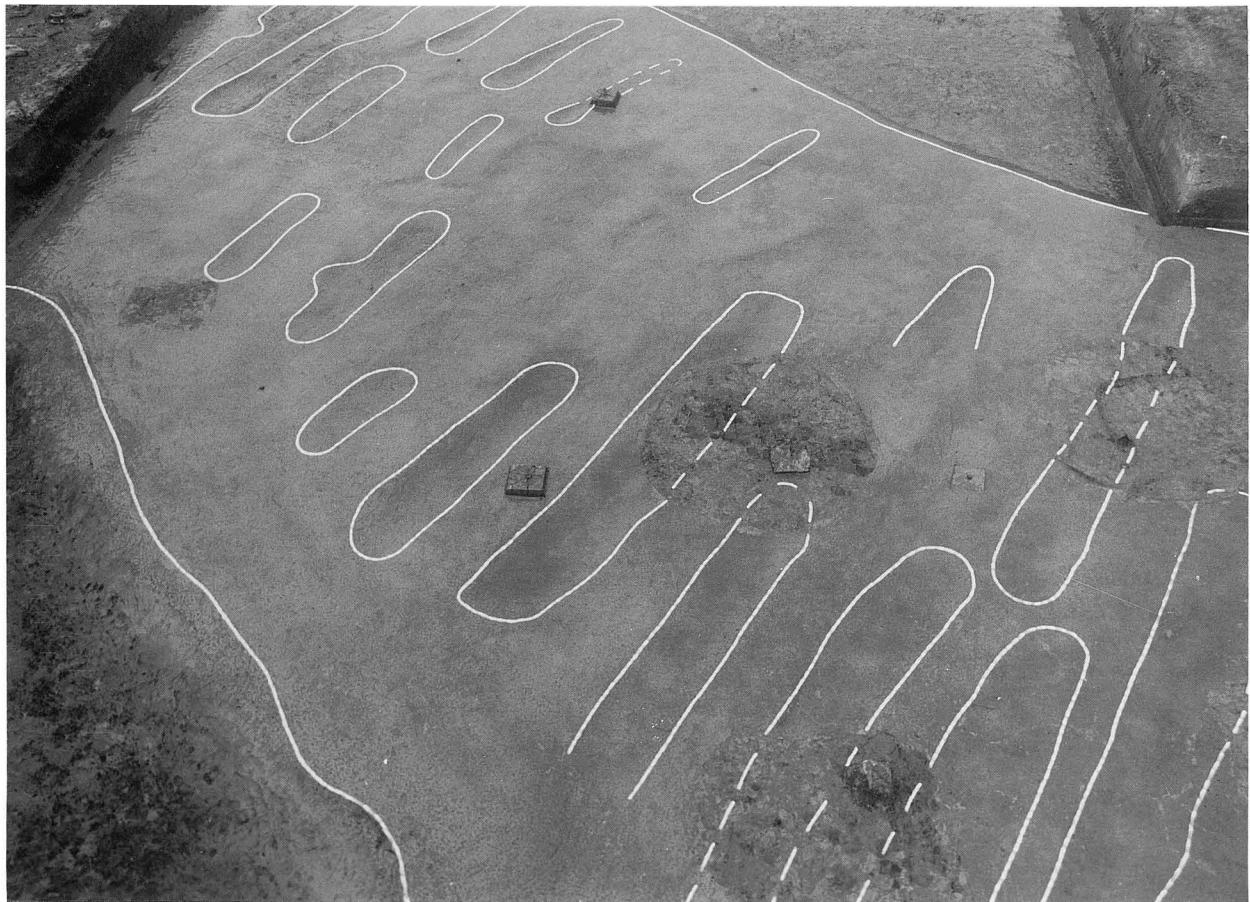
第1調査区 上層遺構（西より）



第1調査区 溝状遺構



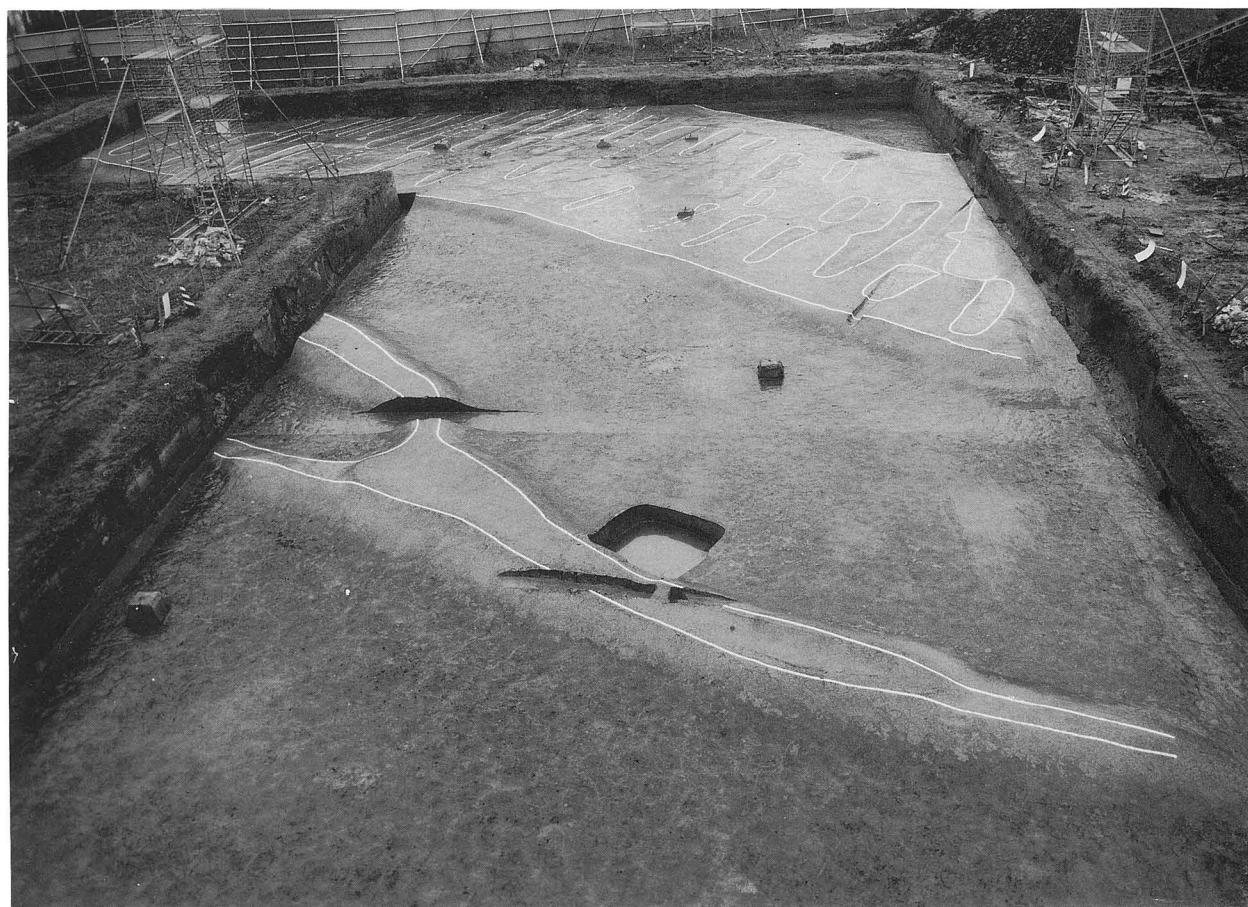
第1調査区 下層堤状遺構（南より）



第1調査区 下層堤状遺構（東より）



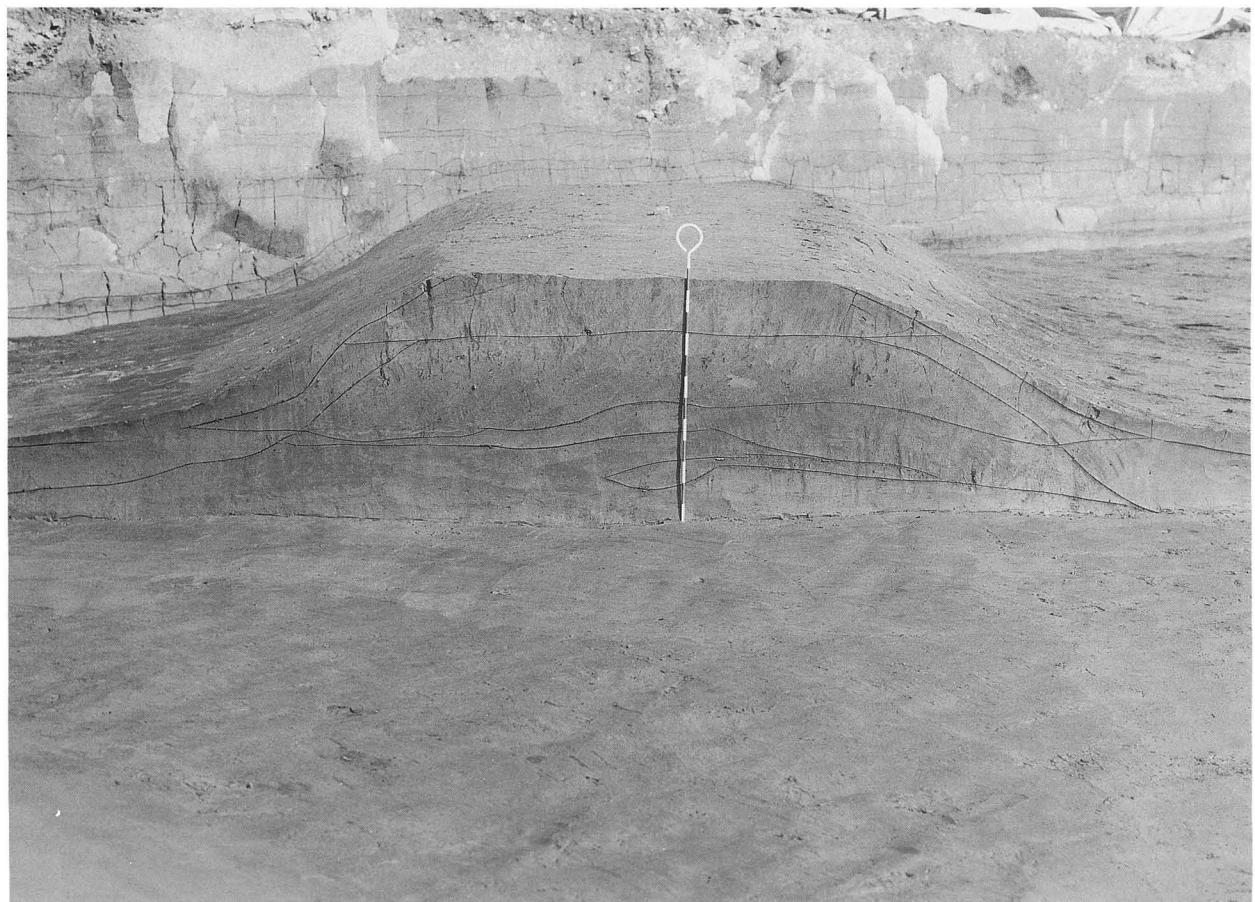
第1調査区 下層堤状遺構（東より）



第1調査区 小堤状遺構（西より）



第1調査区 下層小堤状遺構（南東より）



小堤状遺構断面写真



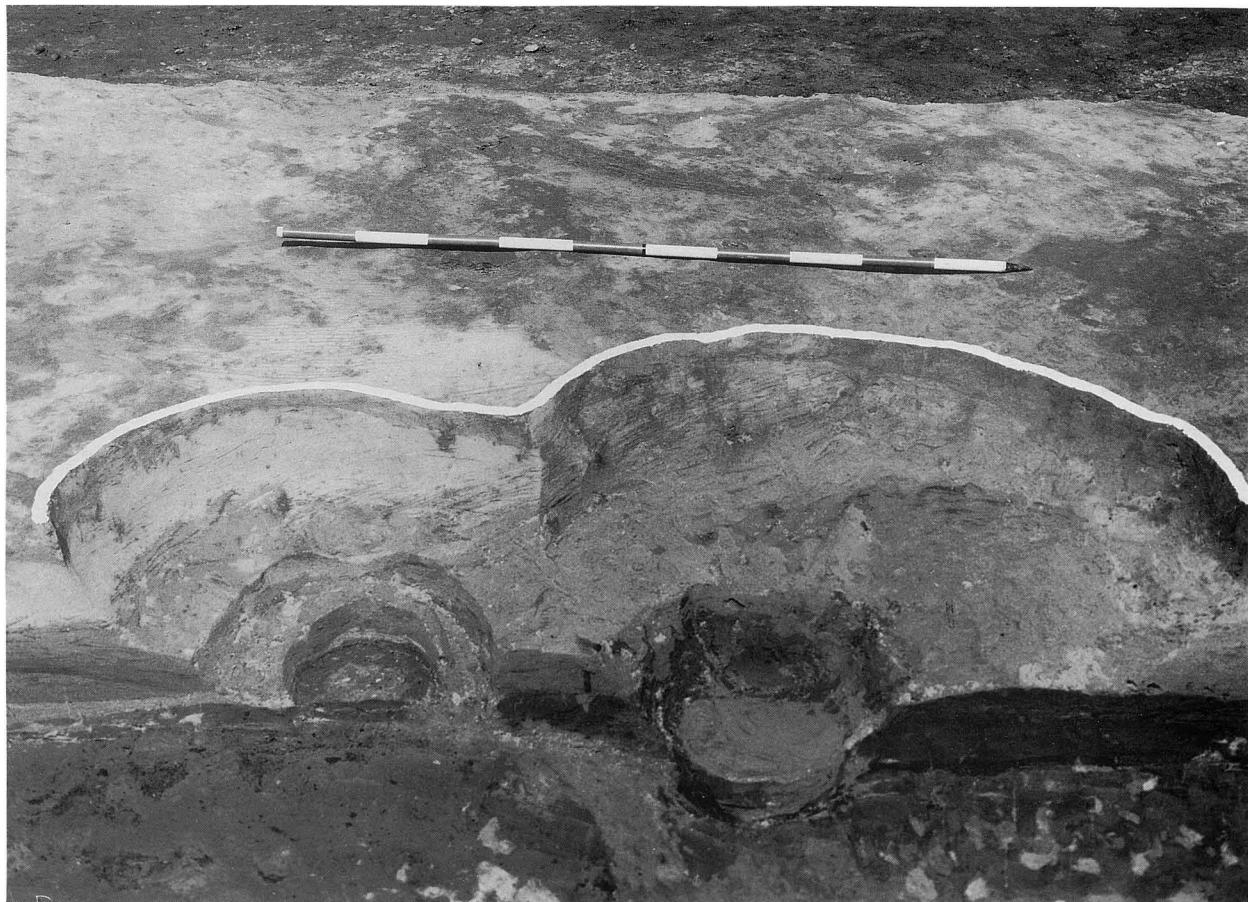
第2調査区 上層遺構（北西より）



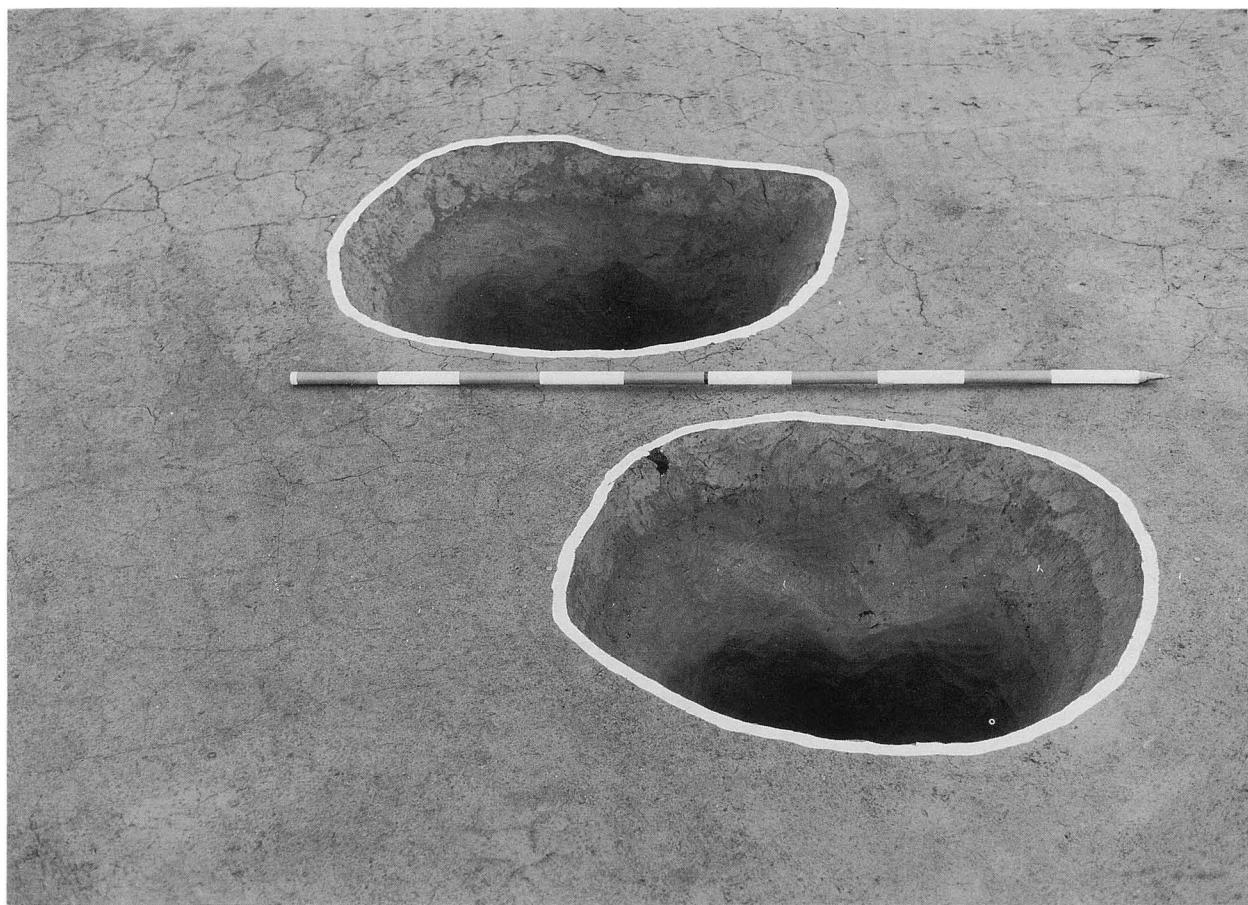
第2調査区 上層遺構（西より）



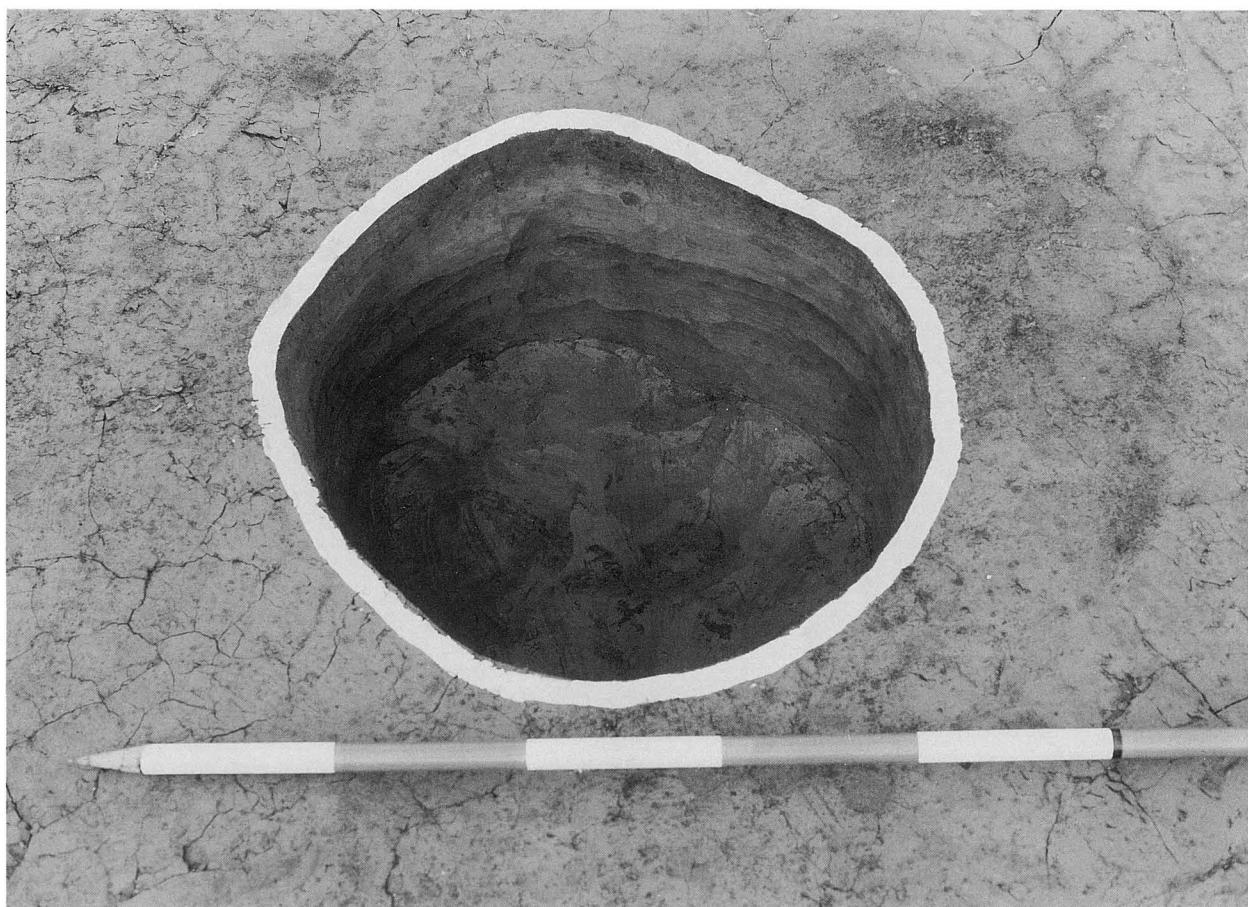
第2調査区 井戸1(左)と井戸5(右)



井戸1及び井戸5（井戸枠撤去後）



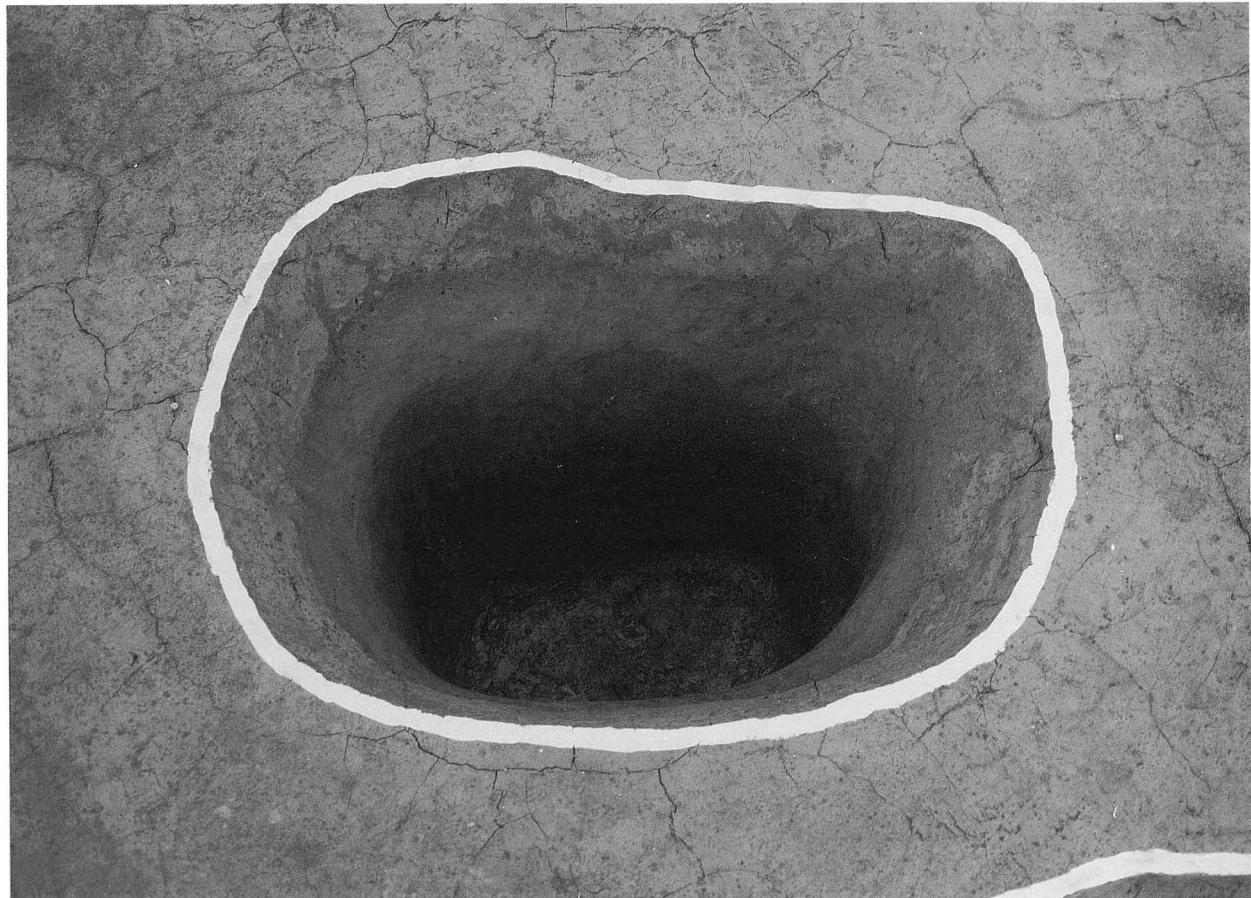
第2調査区 井戸2・井戸3



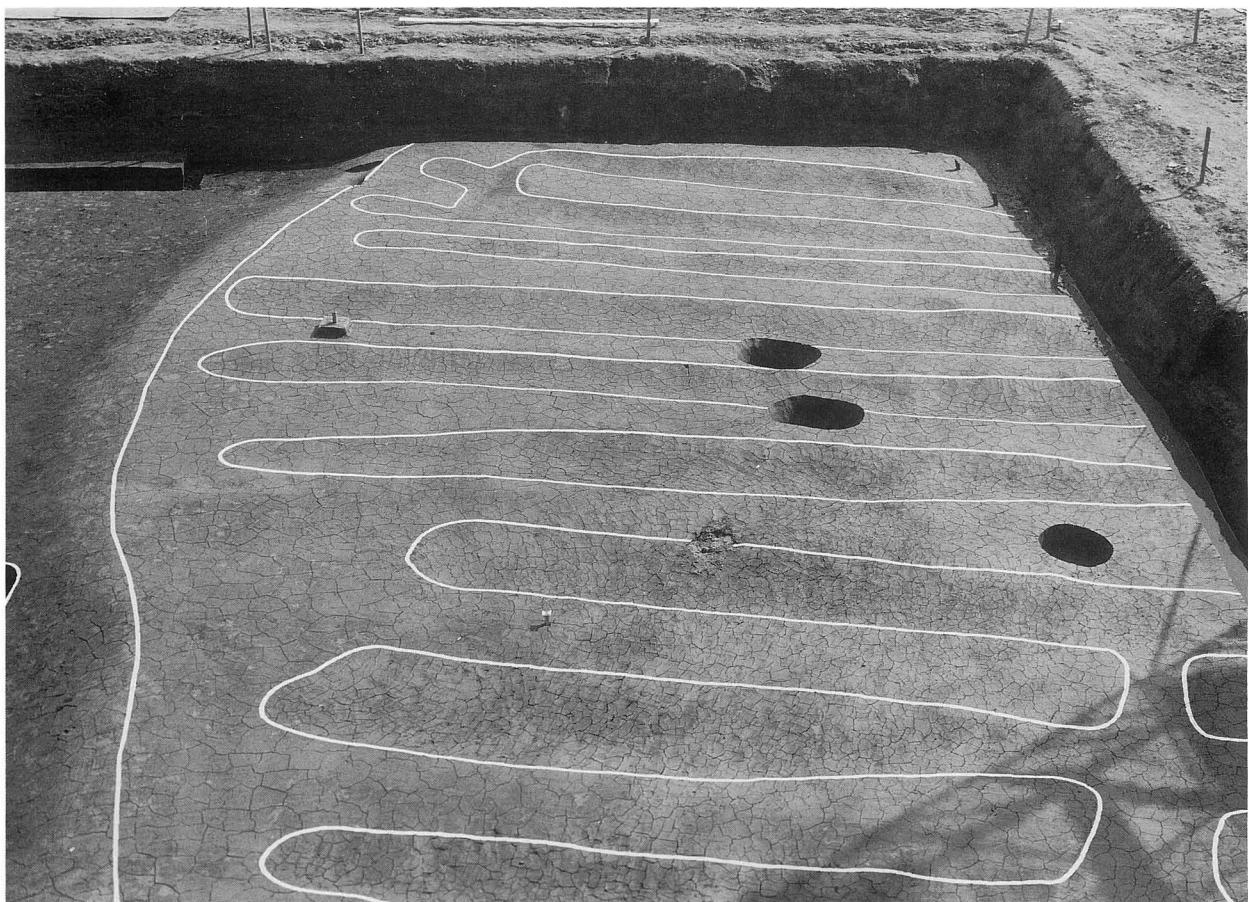
第2調査区 井戸4



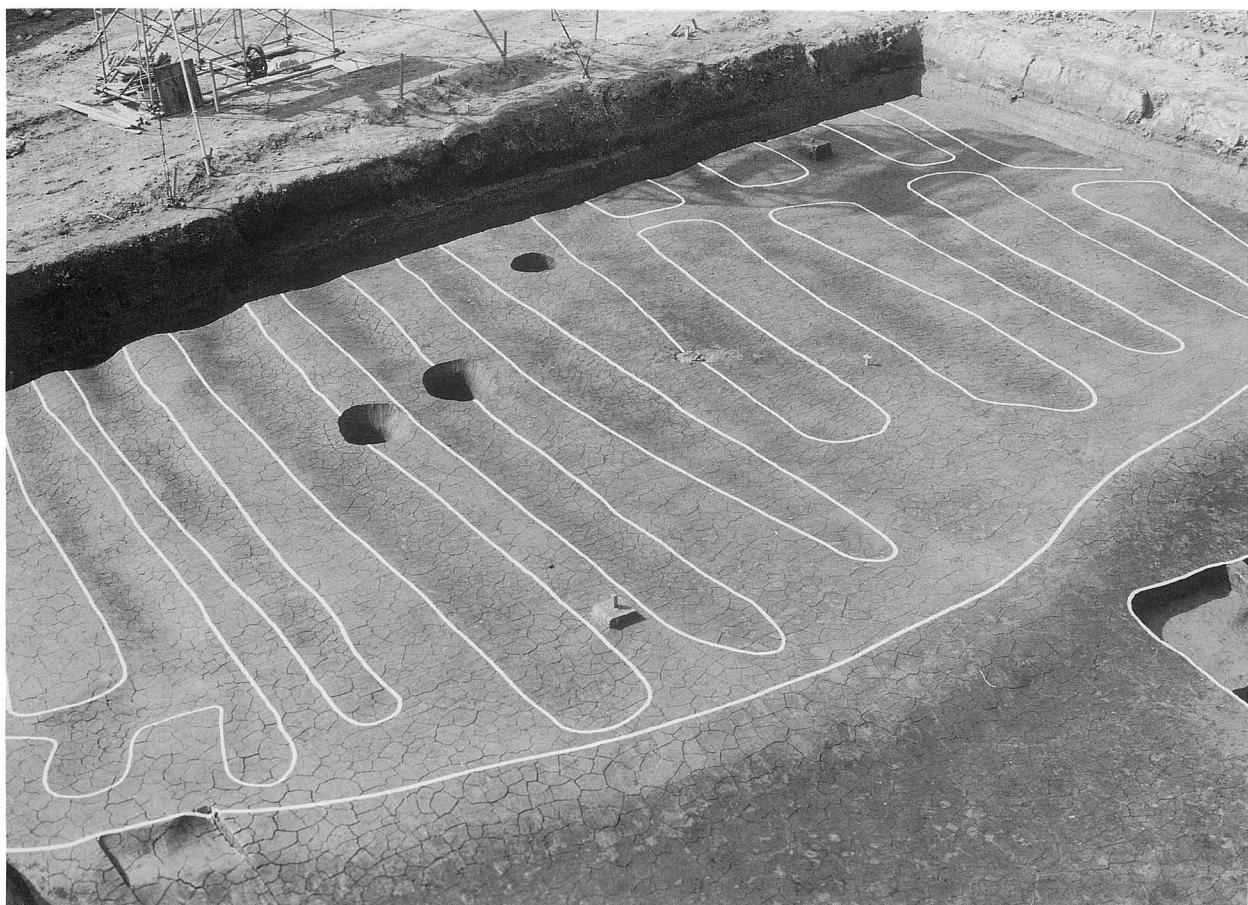
井戸 2



井戸 3



第2調査区 下層堤状遺構（北より）



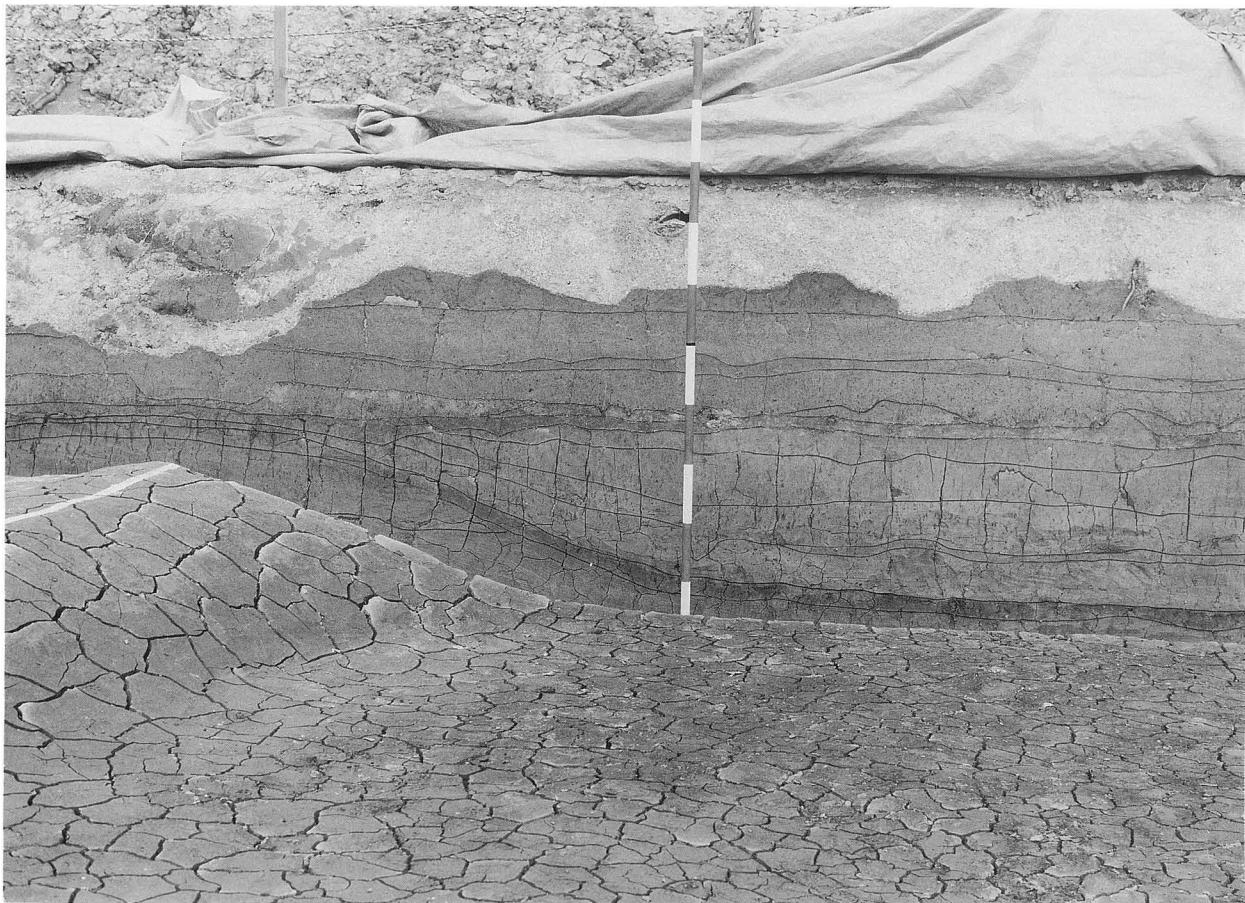
第2調査区 下層堤状遺構（南東より）



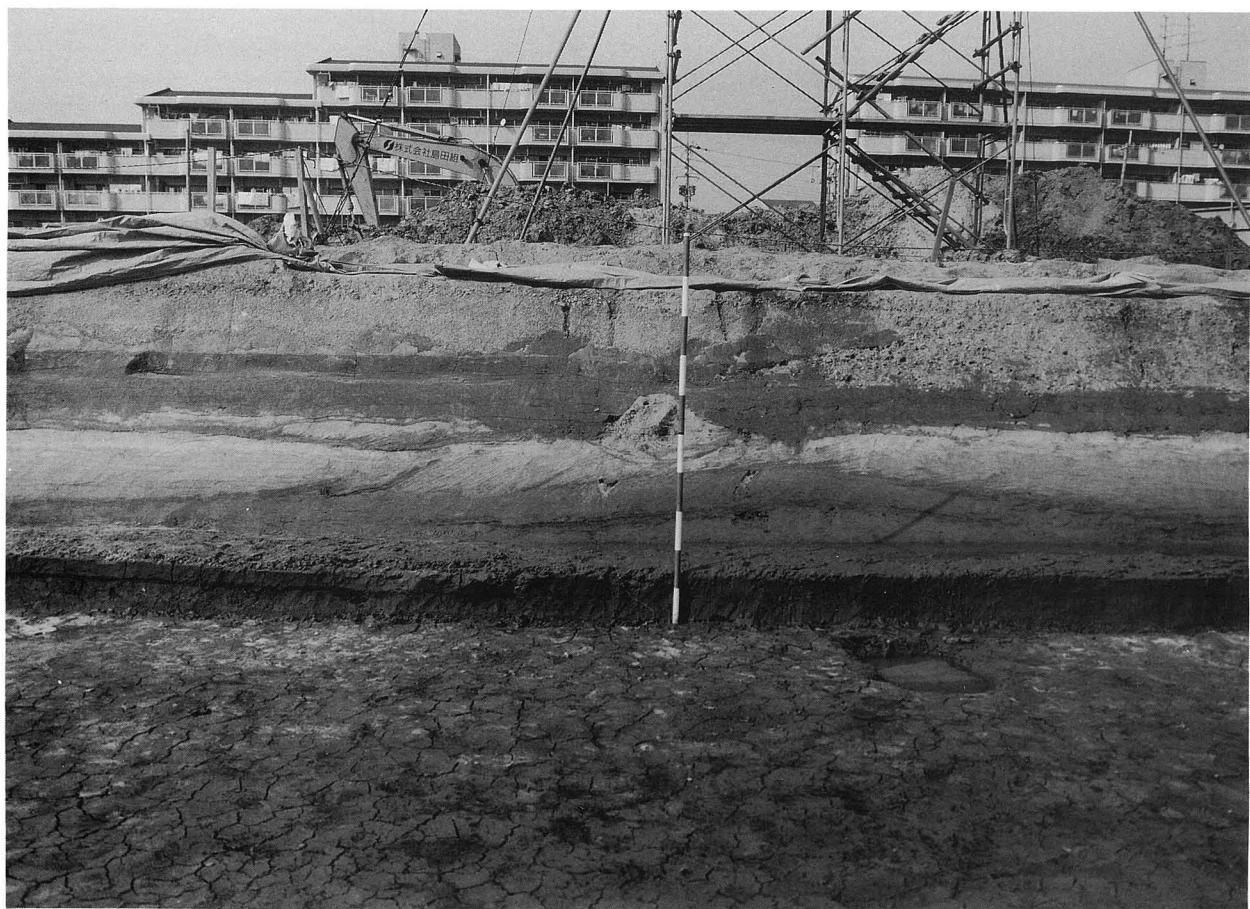
第2調査区 下層堤状遺構（北より）



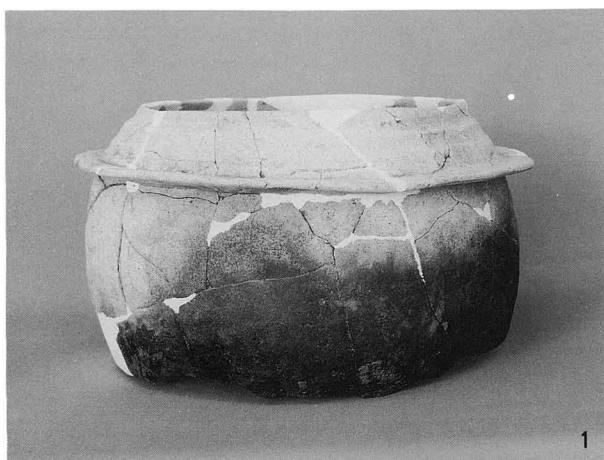
第2調査区 下層堤状遺構（東より）



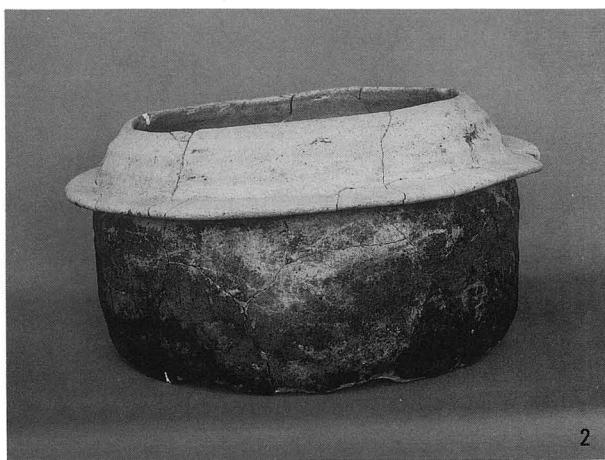
第2調査区 北断面



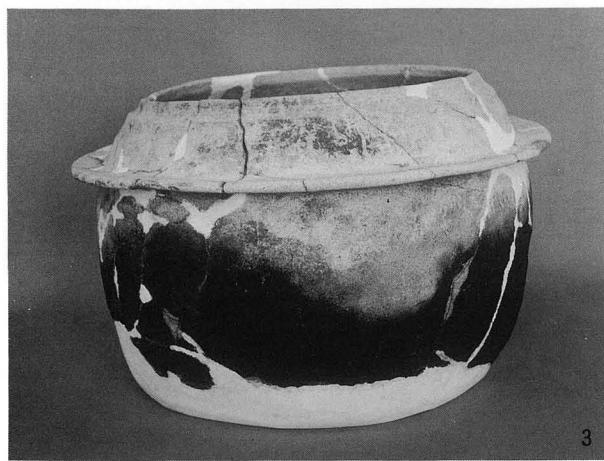
第2調査区 北断面（砂層堆積状況）



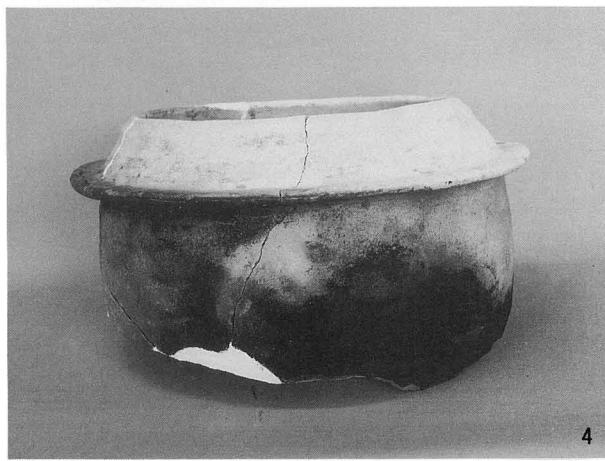
1



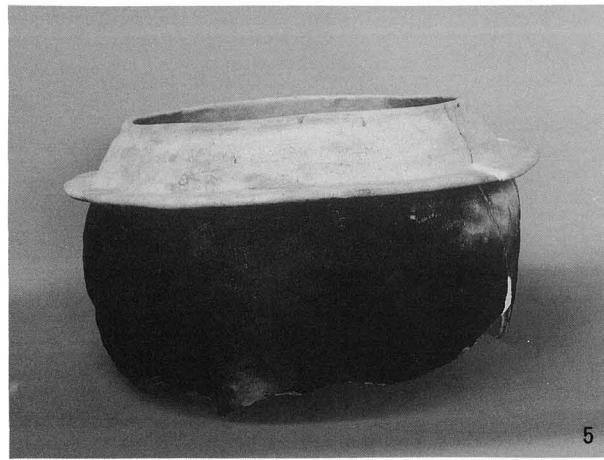
2



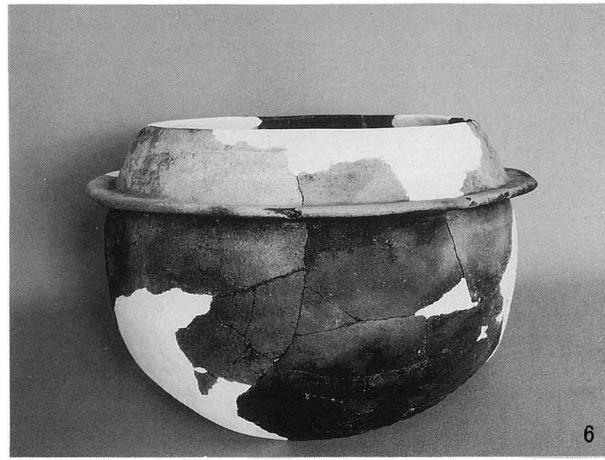
3



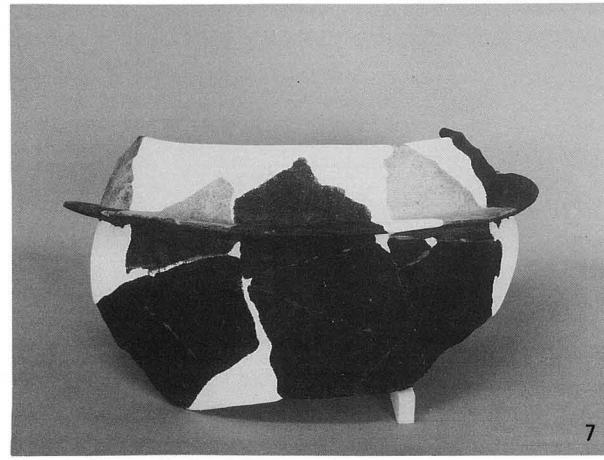
4



5



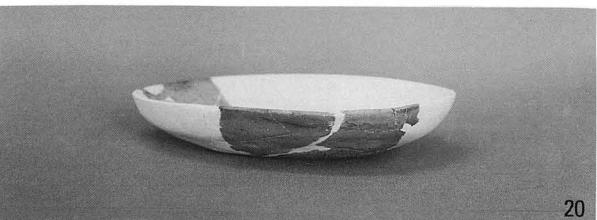
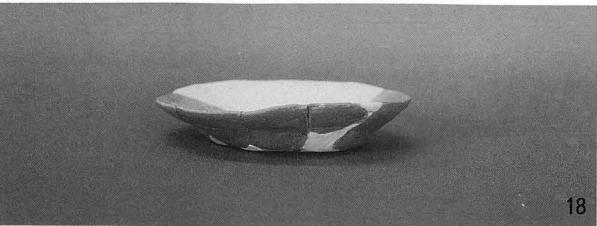
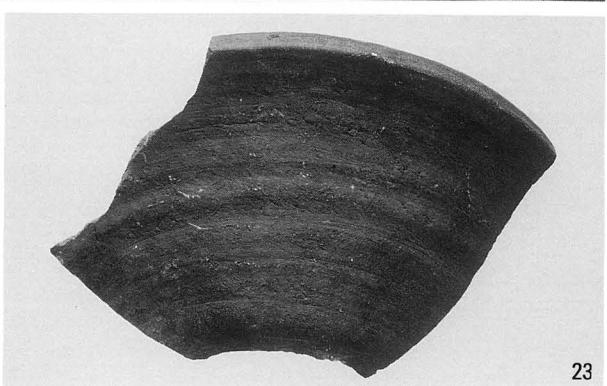
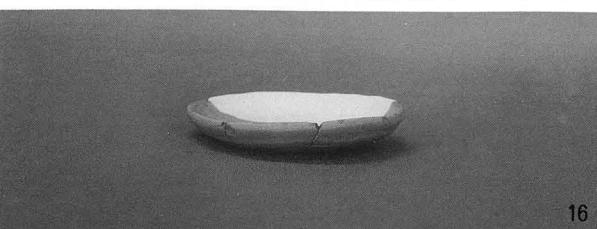
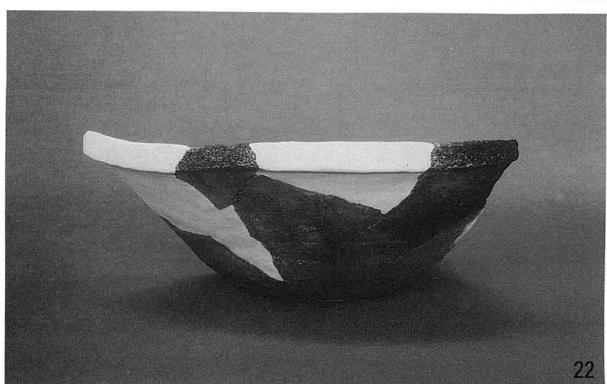
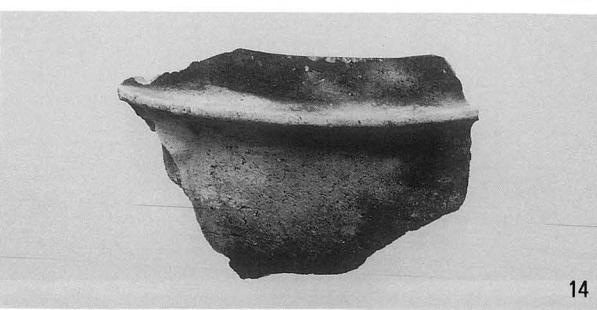
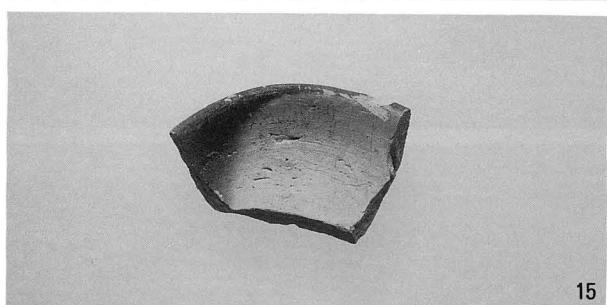
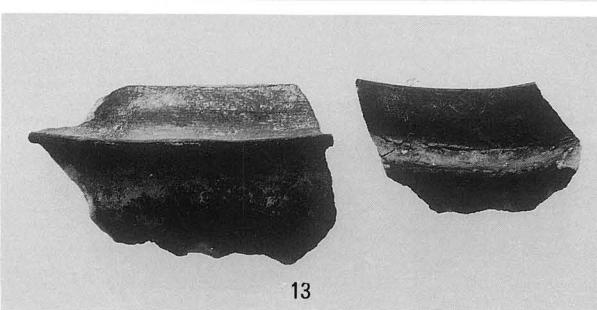
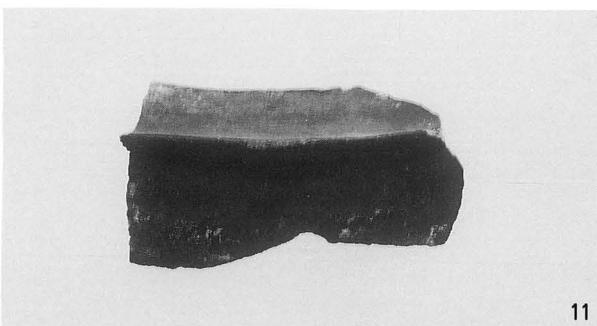
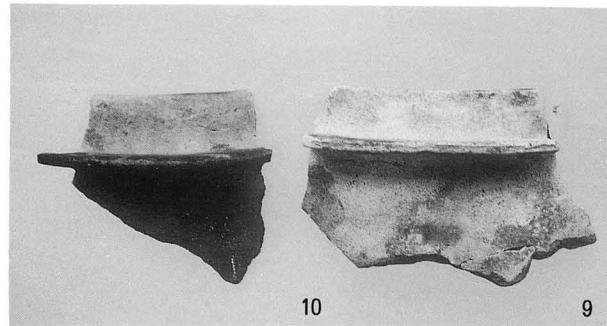
6

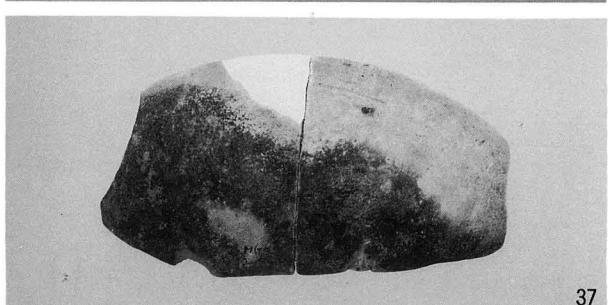
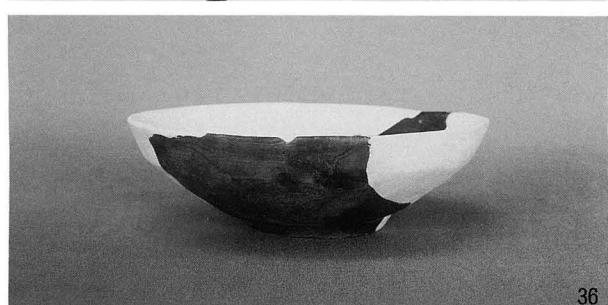
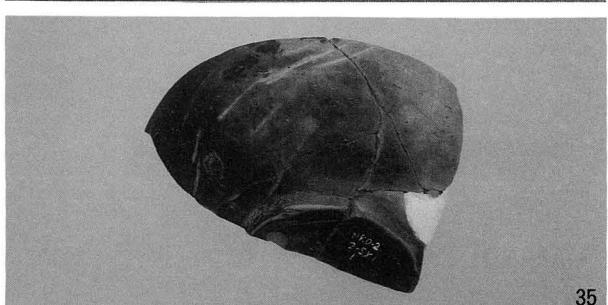
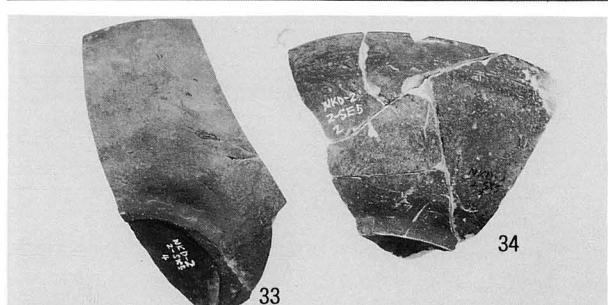
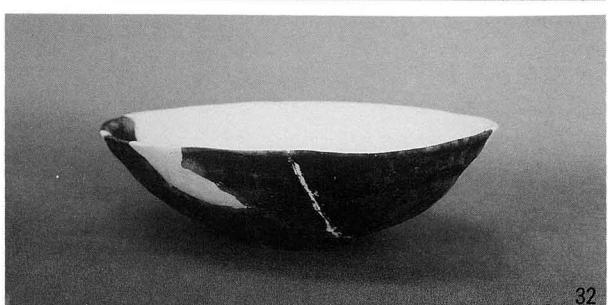
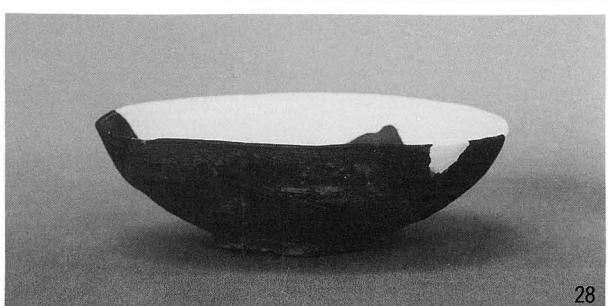
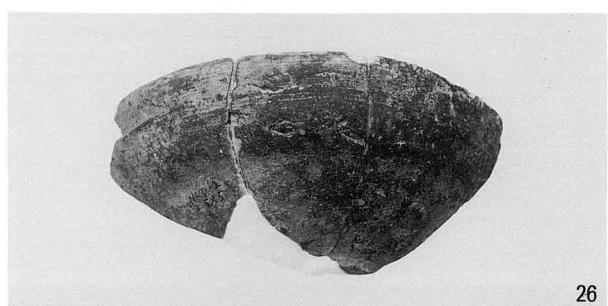
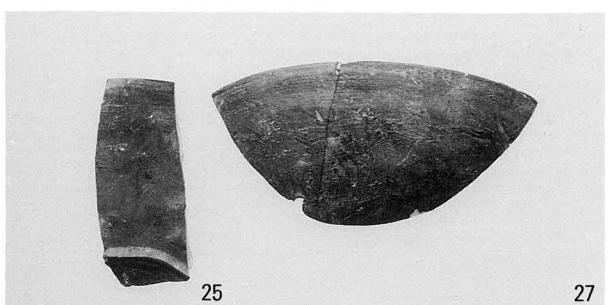
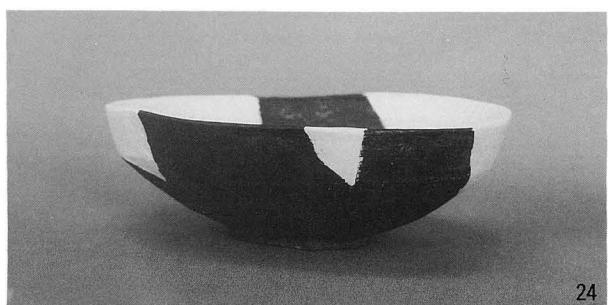


7

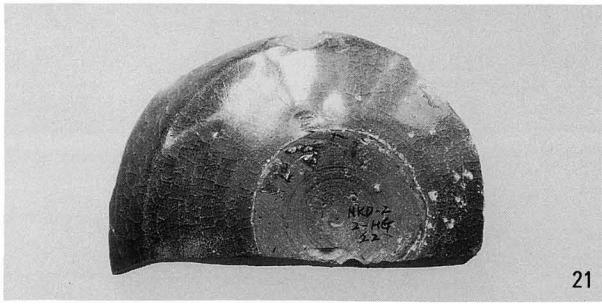
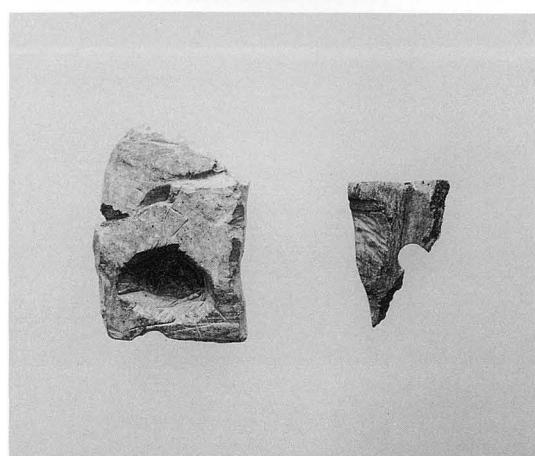
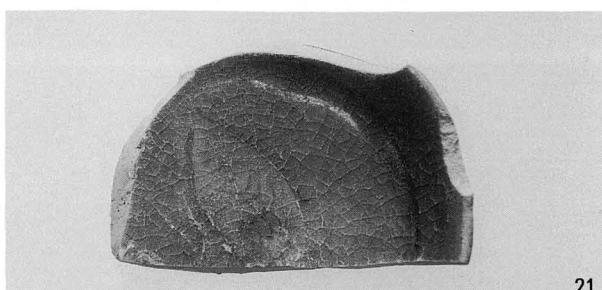
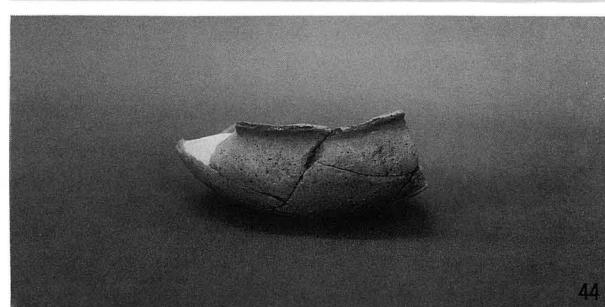
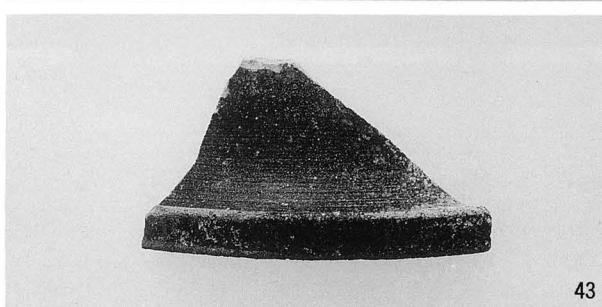
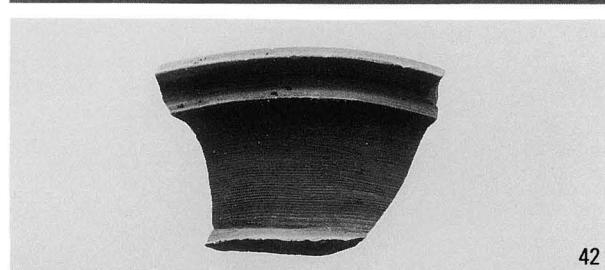
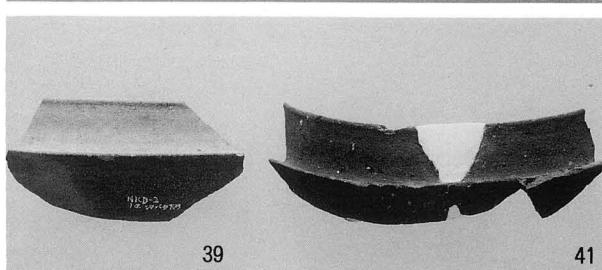
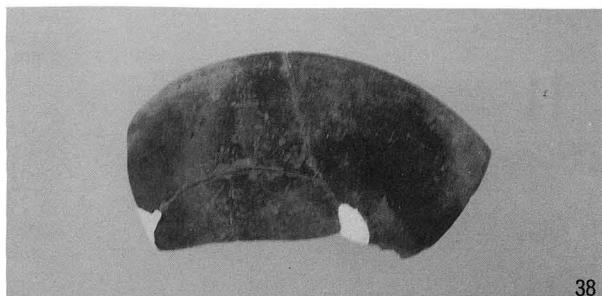


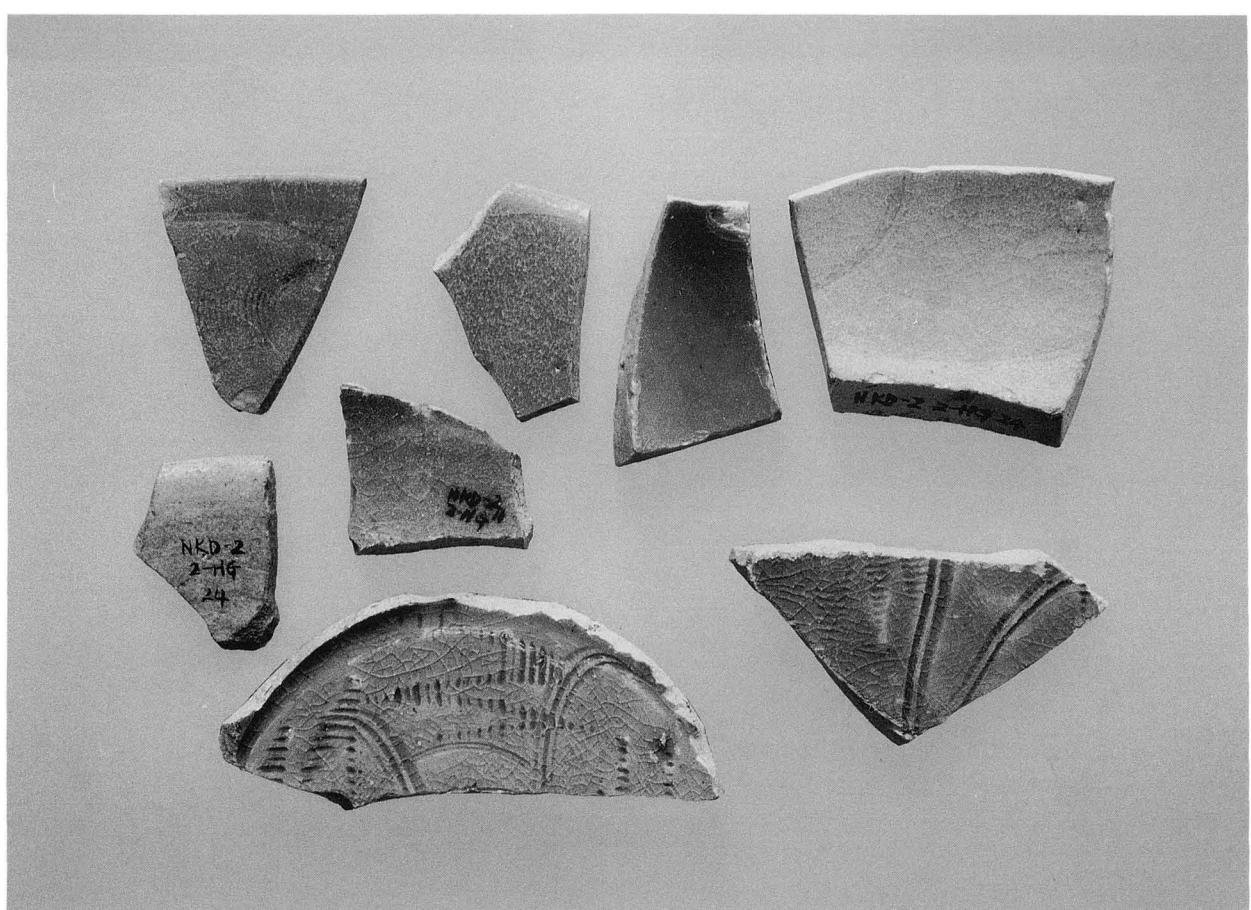
8





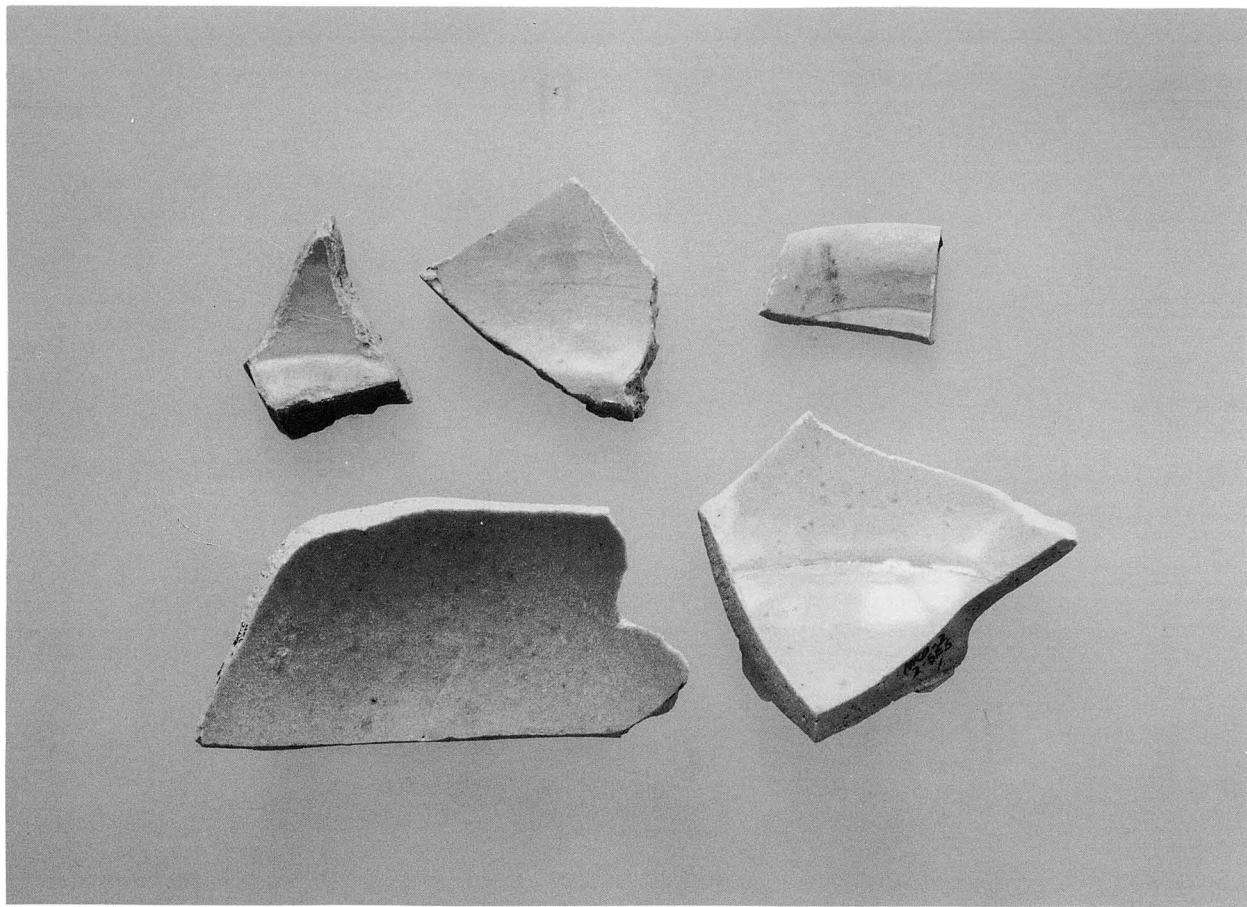
図版 17
出土遺物写真



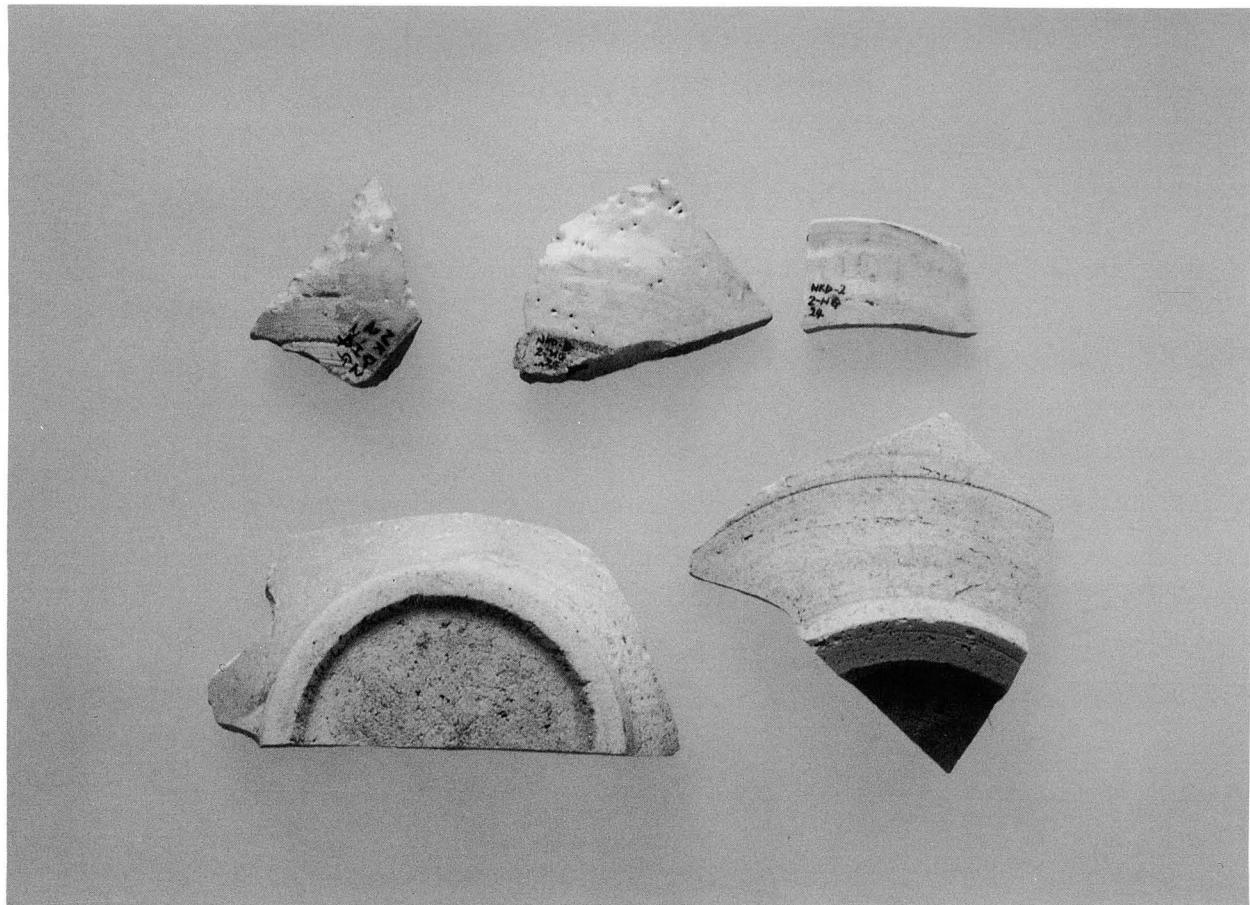


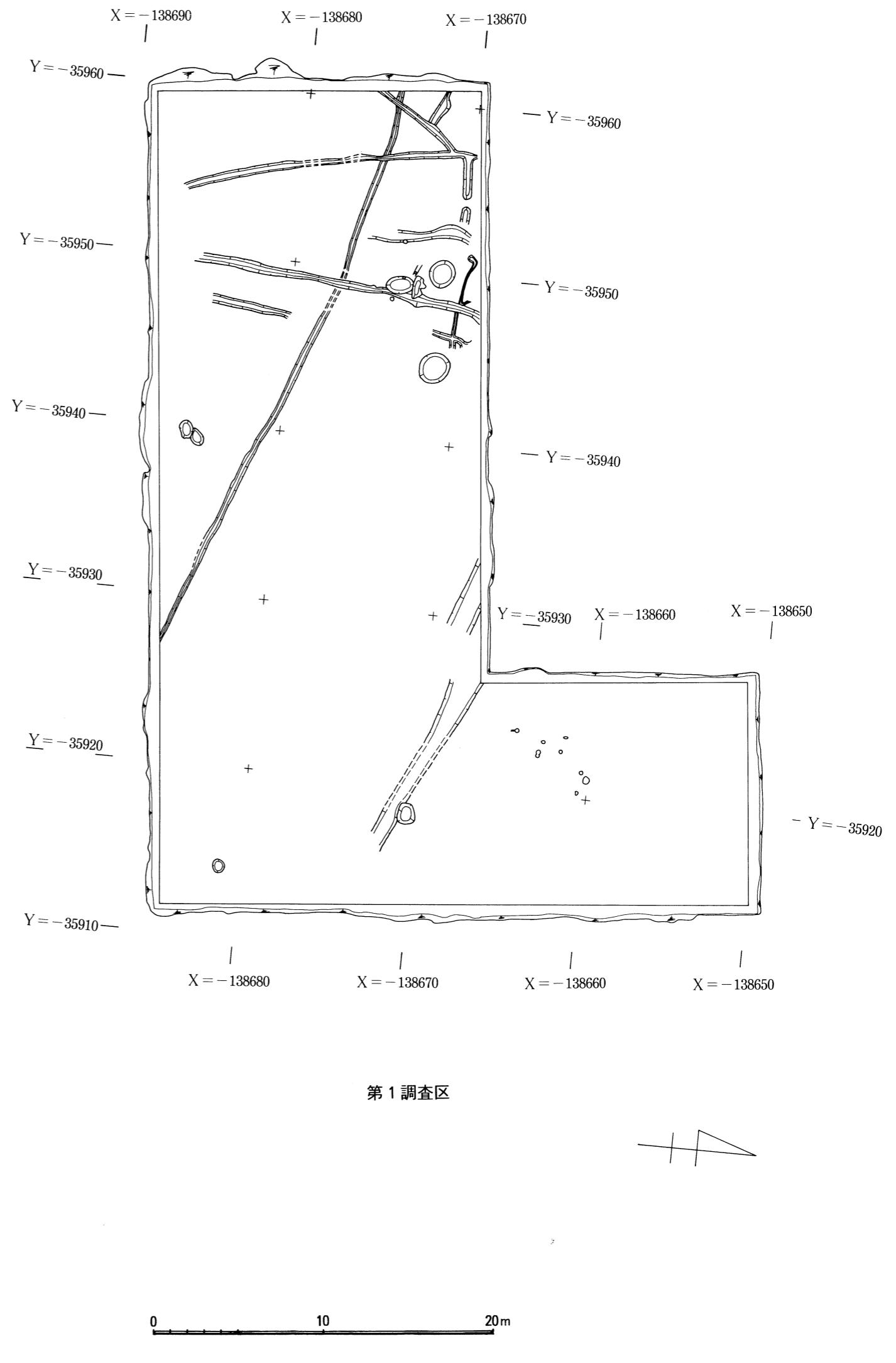
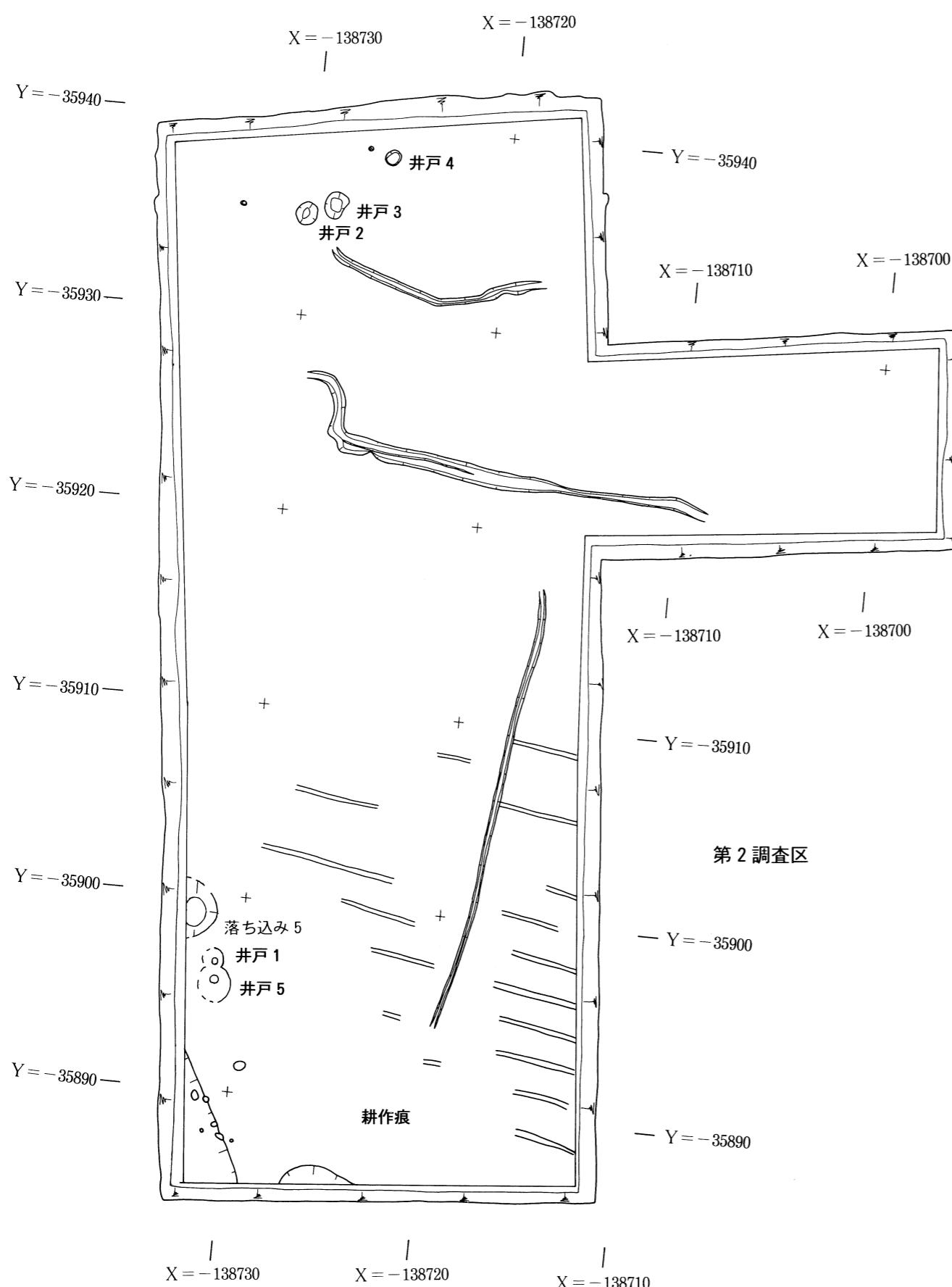
青磁類

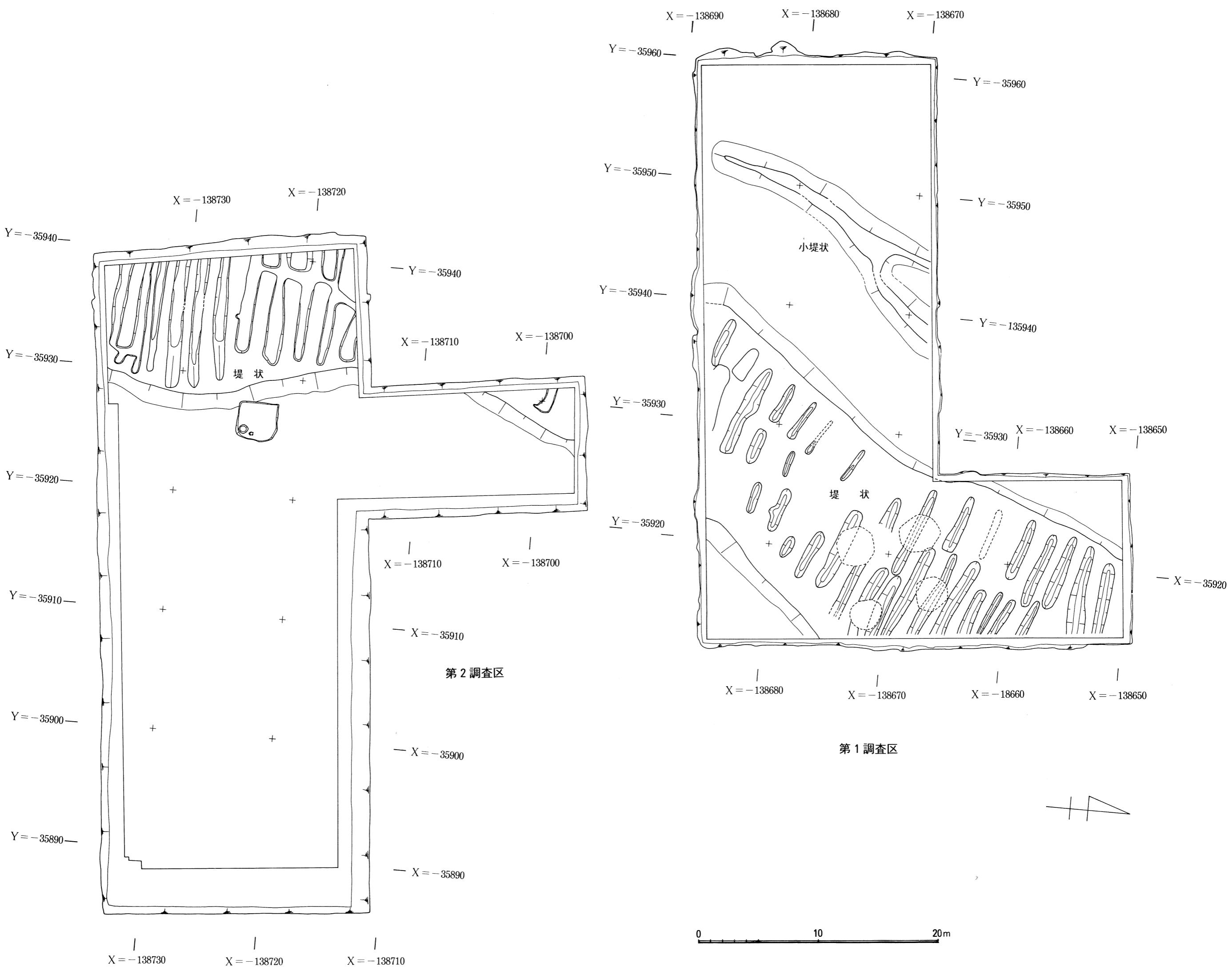


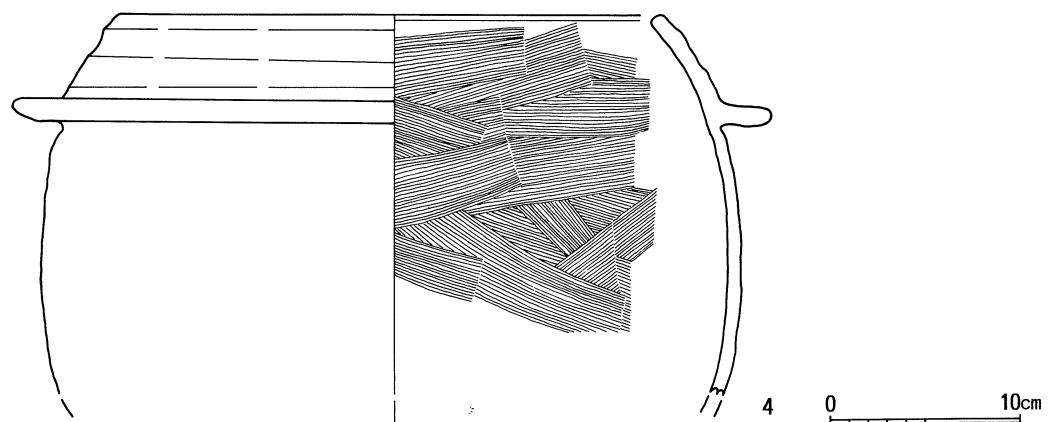
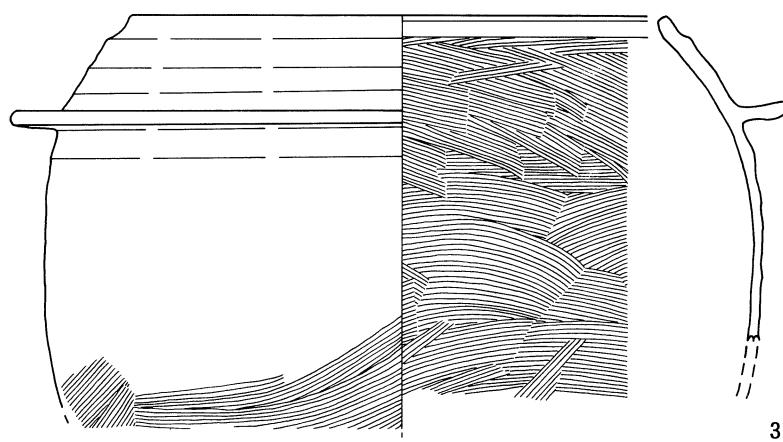
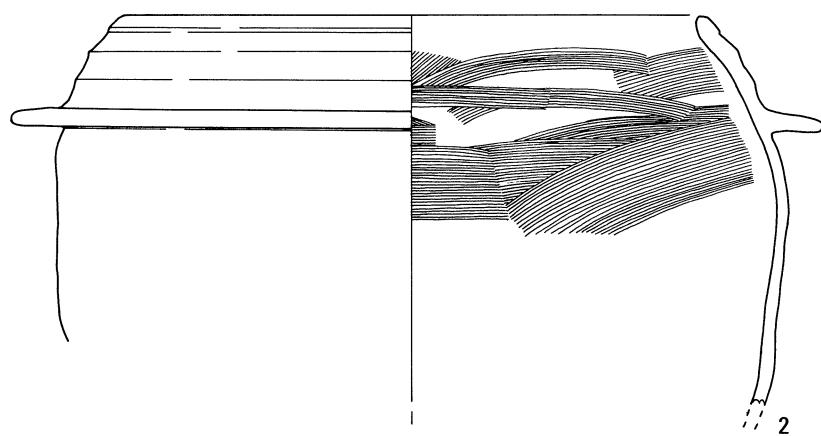
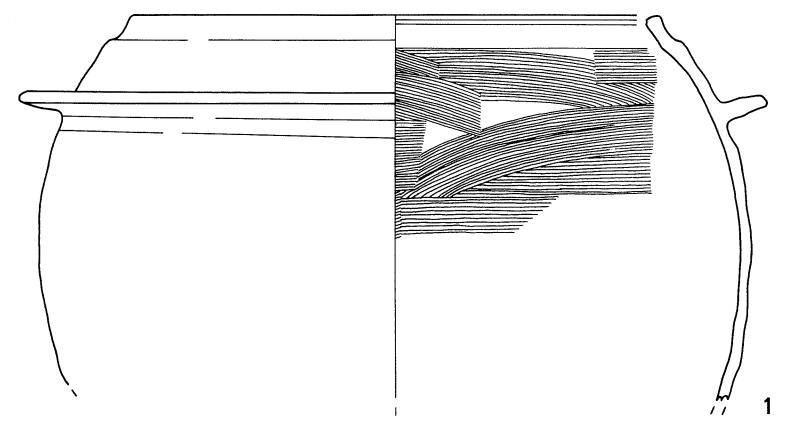


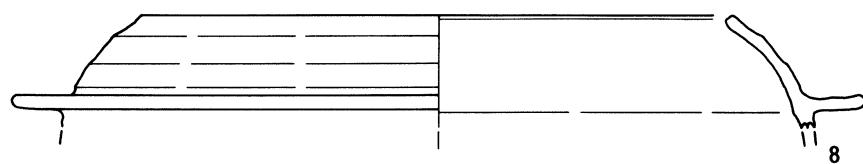
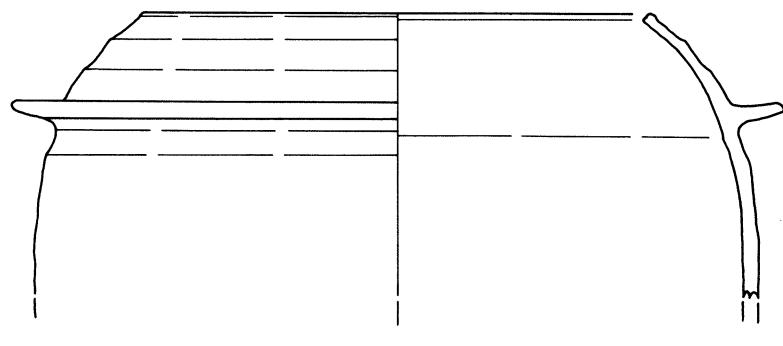
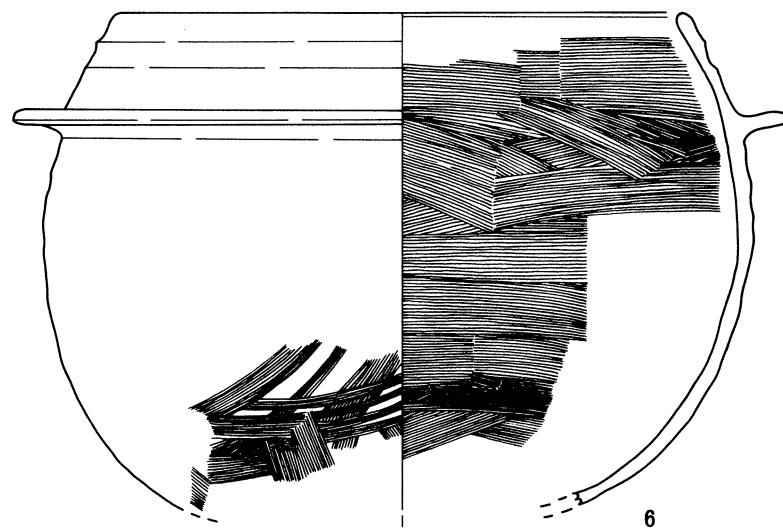
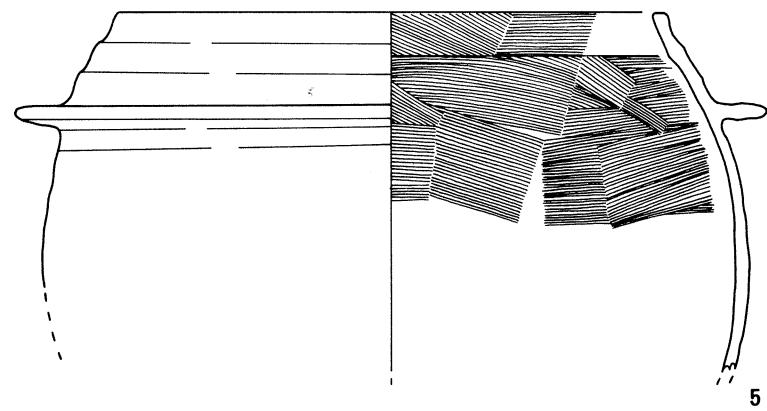
白磁類



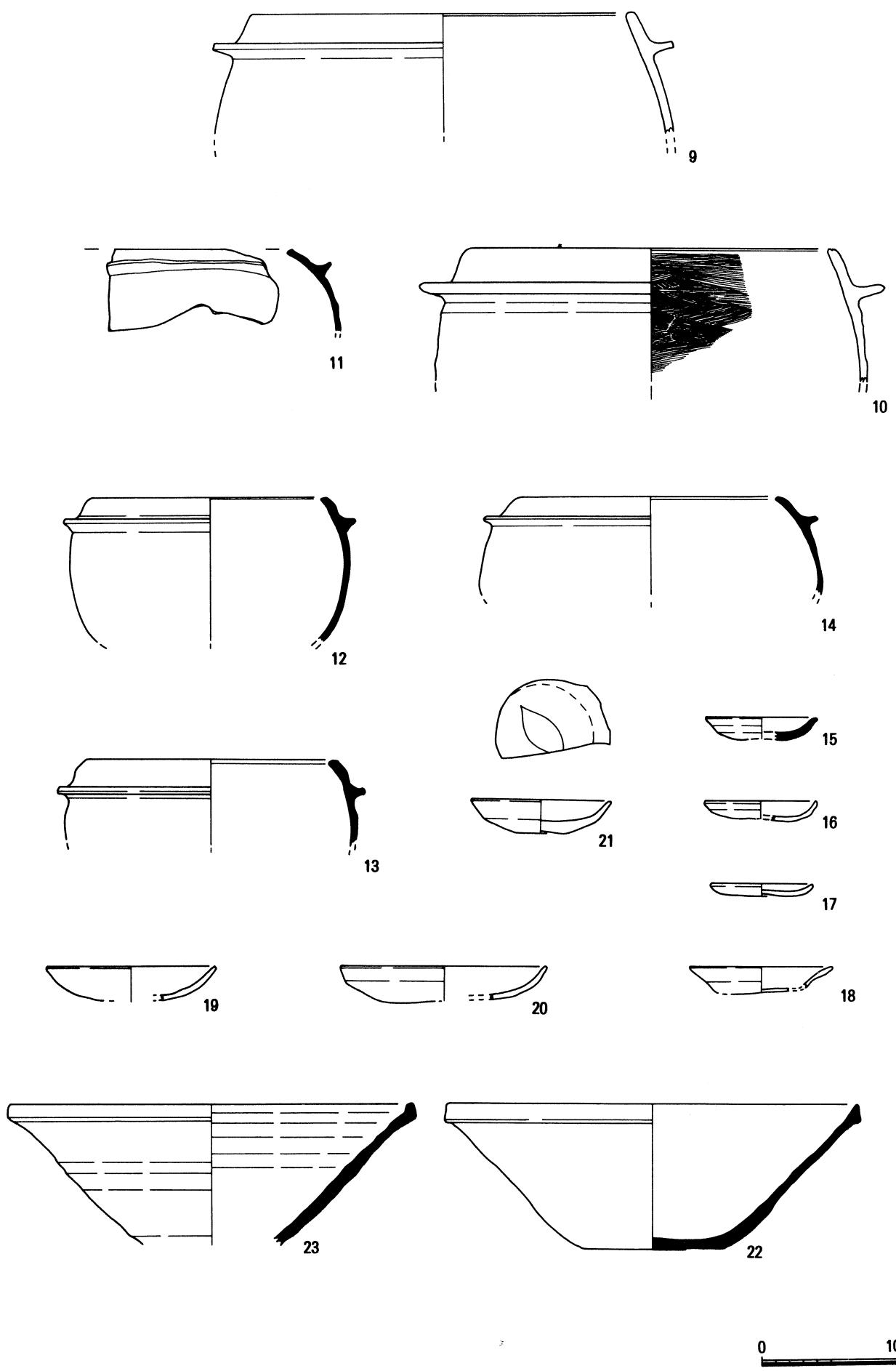


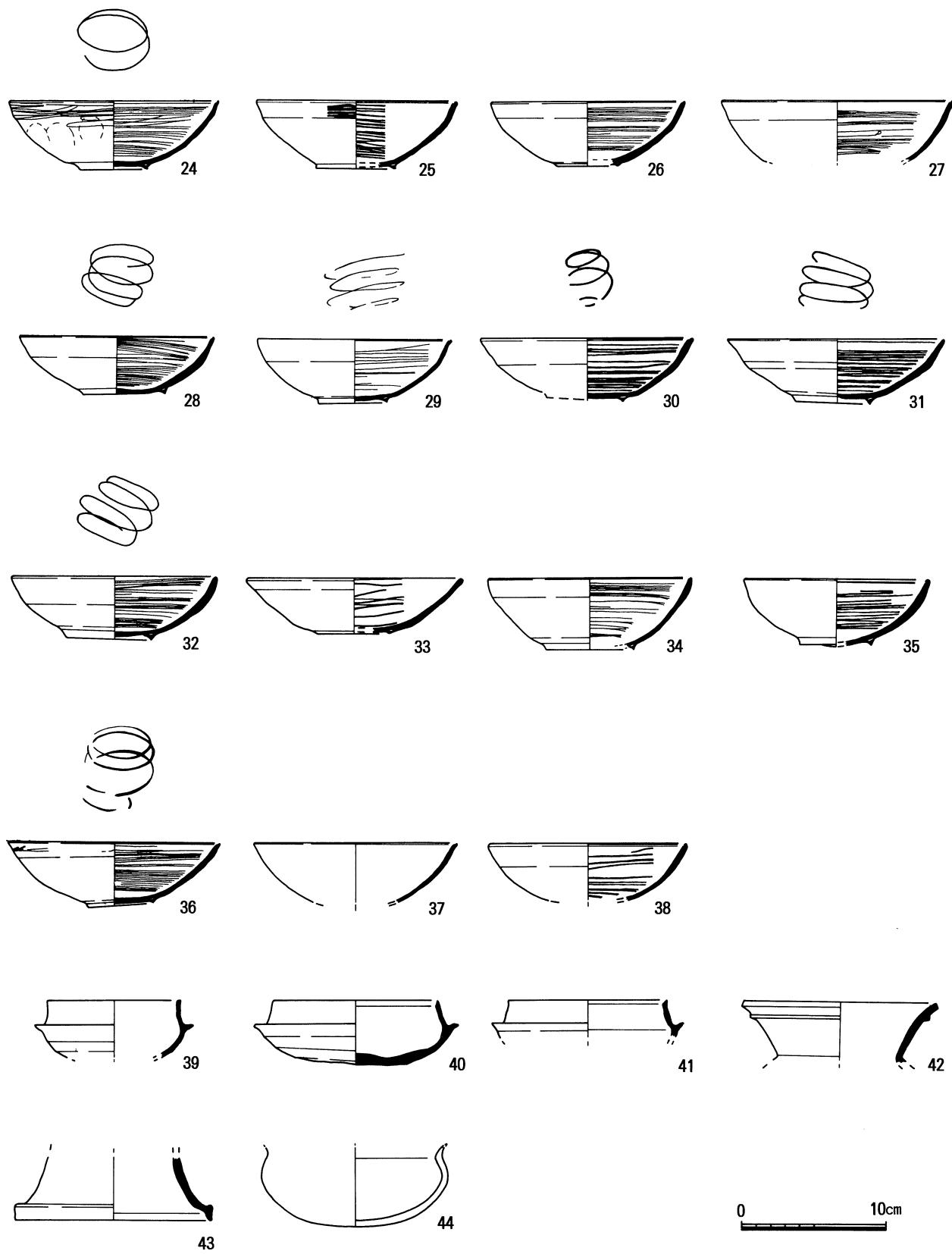






0 10cm





付章 自然科学的検討

中神田遺跡（2次）発掘調査に伴う花粉分析

川崎地質株式会社 渡辺正巳

はじめに

中神田遺跡は大阪府中部の寝屋川市南西部に分布する。

本報は、2次調査に伴い遺跡内および周辺地域の植生変遷などを明らかにする目的で、寝屋川市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した調査報告書の概報である。

分析試料について

分析試料は寝屋川市教育委員会と川崎地質株式会社が協議の上、川崎地質株式会社が採取を行った。

図1に示す2地点で花粉分析試料、および¹⁴C年代測定用試料を採取した。各地点の柱状図、および試料採取層準（¹⁴C年代試料については層準と測定値）を図2、3の左側に示す。

分析方法および分析結果

(1) 分析方法

花粉分析の処理は、渡辺（1995）に従って行った。花粉同定は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で200を越えることができなかった。

¹⁴C年代測定では、比例計数管を用い半減期5568年で計算した。また、補正計算は行っていない。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図2、3の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基準にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

¹⁴C年代測定結果を表1に示す。

表1 ¹⁴C年代測定結果

測定年代 (y.B.P.)	測定番号
1,070±80	I-18,782
3,650±100	I-18,783
4,380±110	I-18,784

考 察

(1) 花粉分帯

花粉分析結果および層序対比をもとに、地域花粉帯の設定（花粉分帯）を行った。花粉組成の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

Ⅲ帯（第2調査区北壁西試料No.15～8）

アカガシ亜属が卓越するほか、モミ属、スギ属、シイノキ属—マテバシイ属、コナラ亜属も他の種類に比べ高い出現率を示す。また、草本花粉はほとんど出現しない。

Ⅱ帯（第2調査区北壁西試料No.7～5）

ツガ属、コウヤマキ属、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示す。これらの内、ツガ属、コウヤマキ属は急激な減少傾向を示し、マツ属（複維管束亜属）、スギ属は増加傾向を示す。またアカガシ亜属は不安定な出現率を示す。草本花粉は試料No.7、6で高率になり、特にイネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、タデ属（ウナギツカミ節—サナエタデ節）、ヨモギ属が高い出現率を示す。

I帯（第1調査区北壁東試料No.5～1、第2調査区北壁西試料No.4～1）

アカガシ亜属、マツ属（複維管束亜属）、スギ属の出現率が他の種類に比べ、特に高い出現率を示す。このほか、ツガ属、シイノキ属—マテバシイ属、コナラ亜属も他に比べやや高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

(2) 既知の結果との比較と堆積年代

寝屋川市内では、従来からいくつかの遺跡で花粉分析が実施されてきており、中神田遺跡内でも1次調査の際に寝屋川市教育委員会・川崎地質株式会社（1995）により花粉分析が行われている（図3）。

出土遺物と¹⁴C年代から、今回の分析結果のI帯は平安時代中頃から鎌倉時代末頃の植生を表していると考えられる。この時代は、1次調査のII帯（以下1-II帯とする）の時期にほぼ一致する。1-II帯では、アカガシ亜属が卓越し、スギ属をはじめとする針葉樹の諸種を伴うという花粉帯の特徴があった。今回のI帯では、1次調査に比べモミ属、ツガ属がやや低率で、マツ属（複維管束亜属）、スギ属がやや高率であるなど、若干の違いがあるものの、花粉組成はほぼ一致する。

また¹⁴C年代から、今回のIII帯は縄文時代中期以降の植生を表していると考えられる。一方III帯からII帯への変化で稲作を示唆するイネ科（40ミクロン以上）花粉が急増することから、III帯は縄文時代晩期以前の、II帯は弥生時代以降の植生を表している可能性がある。

I帯、III帯の推定年代から、II帯は弥生時代から平安時代中頃の植生を表していると考えられる。1次調査での同時期と考えられる花粉組成ではスギ属が卓越し、ツガ属、コウヤマキ属はほとんど認められない。また、寝屋川市内での既知の分析結果でも対応する花粉組成は認めがたい。したがって、極めて局地的な植生を反映している可能性がある。一方、試料No.6層準（II帯）と5層準（I帯）では層相が大きく変わり、試料No.5層準より上位（I帯）では層相変化が激しくなる。同様な堆積物の層相は1次調査でも認められ、鎌倉時代の堆積物（1-II帯）の層相変化が激しいことに対し、それ以前（1-I帯）の堆積物は比較的安定している。鎌倉時代以前に不整合（無堆積の時期）があり、1-I帯、今回のII帯がそれぞれの地点で欠如している可能性もある。またII帯下部の2試料はツガ属、コウヤマキ属が卓越するとともに、草本花粉、胞子の割合も高い。一般に土壤化を受けた試料にはこの様な花粉組成を示すものが多く、現場での観察ではこの層準に明瞭な土壤化は観察されなかったものの、土壤化の過程で一部の花粉化石が消滅

した可能性もある。

(3) 古環境変遷

花粉分帯をもとに、中神田遺跡周辺での各時期の植生および堆積環境を推定した。

Ⅲ帯期（縄文時代中期から晩期？）

この時期の遺跡周辺は、水走沿岸州に囲まれた小規模な湾、あるいは沼沢湿地であったとされている（梶山・市原、1972）。したがって今回得られた花粉組成のうち、木本花粉の多くは生駒山地から北摂山地から供給されたものと考えられる。

これらの山々の山麓から山腹はカシ類、シイ類を要素とする照葉樹林に被われていたと考えられる。また、山腹から山頂部にはモミ、スギ、ツガ、コウヤマキなどの温帶針葉樹林の存在も予想される。一方ブナ属花粉も検出されるが、北摂山地、生駒山地には高い山がないことから、南方の金剛・葛城山地や、西北方の六甲山地などに分布していたブナを要素とする冷温帶林からの影響であると考えられる。

草本花粉の検出量は少ないものの、ガマ属やカヤツリグサ科、イネ科（40ミクロン未満）などが検出される。遺跡周辺の沼沢湿地には、これらの草本が繁茂していたと考えられる。

Ⅱ帯期（弥生時代？から平安時代？）

イネに由来する可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す一方、イネ科（40ミクロン未満）やカヤツリグサ科、タデ属（ウナギツカミ節—サナエタデ節）などの湿地生の草本花粉や、ヨモギ属など乾燥地を好む草本花粉も高率で出現する。イネ科（40ミクロン未満）やカヤツリグサ科などは水田あるいは周辺に「雑草」として生育したことから、遺跡周辺に水田が広がっていたと考えられる。しかし、沼沢湿地が広がっていた可能性も若干残る。

前述の様にⅡ帯の花粉組成には極めて局地的な植生を表す可能性、広域の植生を表すが他地域で堆積物が欠如している可能性、従来知られている花粉組成から土壤化により一部の花粉化石が消滅した可能性などがある。このようにⅡ帯の花粉組成が表す内容について未確定なことが多いことから、今回は森林植生の復元を行わなかった。今後、遺跡内あるいは周辺の遺跡での分析データおよび考古学的なデータが増えⅡ帯の性格が明らかになった段階で、森林植生の復元を行う。

I帯期（平安時代中頃から鎌倉時代末）

1次調査でも指摘された様に、遺跡内には水田が広がっていたと考えられる。また、ソバ属の花粉も検出され、休耕田や畦でソバ栽培も行われていた可能性がある。

生駒山地や北摂山地の山麓部では、アカマツ、クマシデ類や、コナラ類を要素とする二次林が広がり、いわゆる「里山」が広がっていたと考えられる。また、山腹には照葉樹林が、山腹から山頂部にはスギを主要素とする温帶針葉樹林が広がっていたと考えられる。

まとめ

中神田遺跡で花粉を行い、以下のことが明らかになった。

- (1) 分析結果から、I～Ⅲ帯の地域花粉帯を設定した。
- (2) 今回設定した地域花粉帯のうち、I帯は1次調査のⅡ帯に対応し、平安から鎌倉時代の植生を表す。また、Ⅲ帯は今回新たに確認され、縄文時代中期頃の植生を表す。
- (3) Ⅱ帯の示す花粉組成は従来周辺地域で得られたことのない特徴を示す。この原因として、局地的な植生の反映、地層の欠如、選択的な花粉の消滅などが考えられる。

(4) 縄文時代中期頃から鎌倉時代頃の遺跡周辺の植生変遷が断続的に明らかになった。このなかで、稻作はⅡ帶期以降に行われた可能性が高い。また同時にソバ栽培が行われた可能性も高い。

引用文献

- 梶山彦太郎・市原 実 (1972) 大阪平野の発達史— ^{14}C データーからみた—. 地質学論集. 7, 101-112
寝屋川市教育委員会・川崎地質株式会社 (1995) 中神田遺跡発掘調査係る微化石分析業務委託報告書. 69.
渡辺正巳 (1995) 花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社

図表一覧

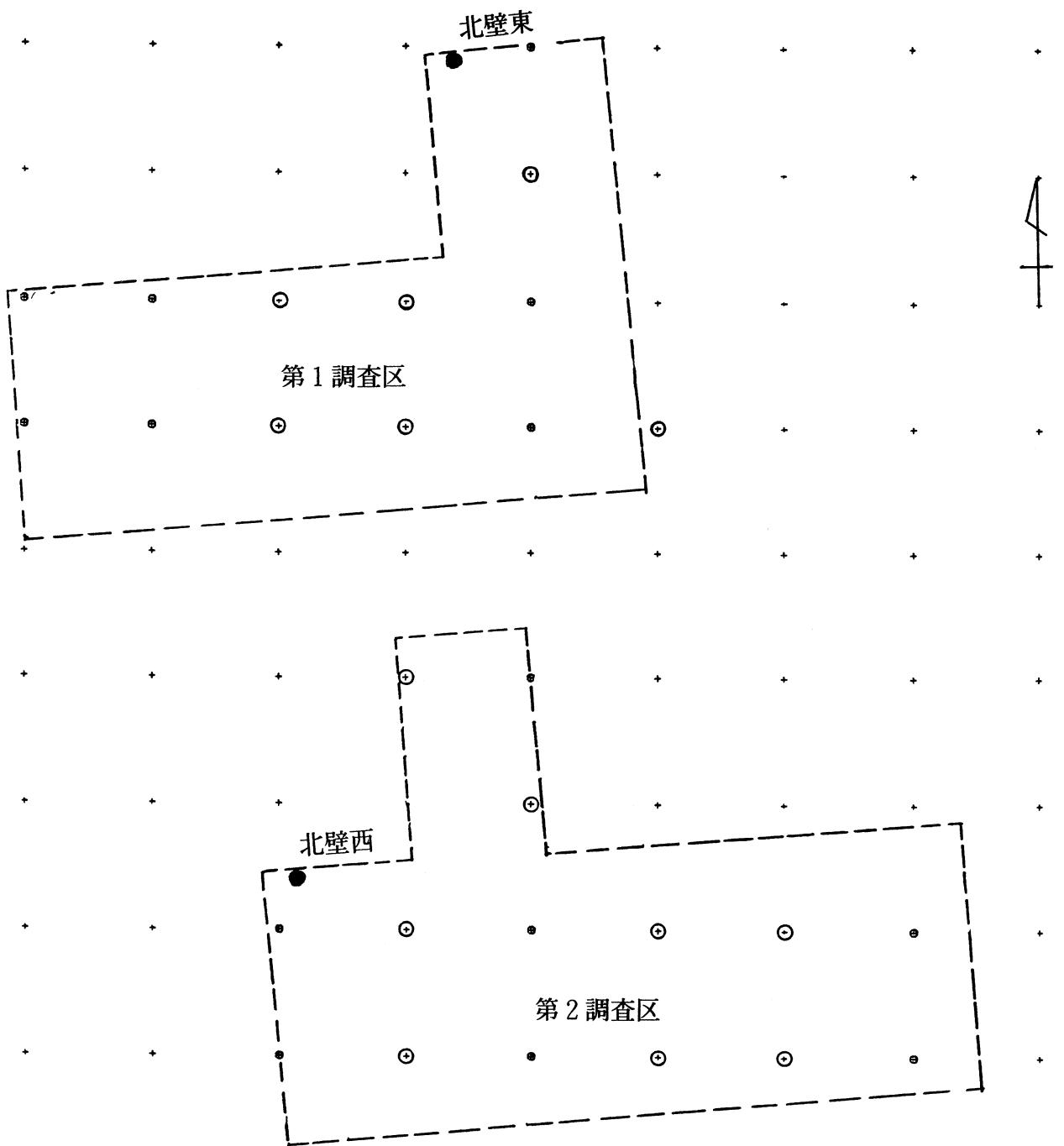
表1 ^{14}C 年代測定結果

図1 試料採取地点

図2 中神田遺跡（2次）第1調査区北壁東の花粉ダイアグラム

図3 中神田遺跡（2次）第2調査区北壁西の花粉ダイアグラム

図4 中神田遺跡1次調査の花粉ダイアグラム（寝屋川市教育委員会・川崎地質株式会社,1995）



縮尺 = 1 / 500

図1 試料採取地点

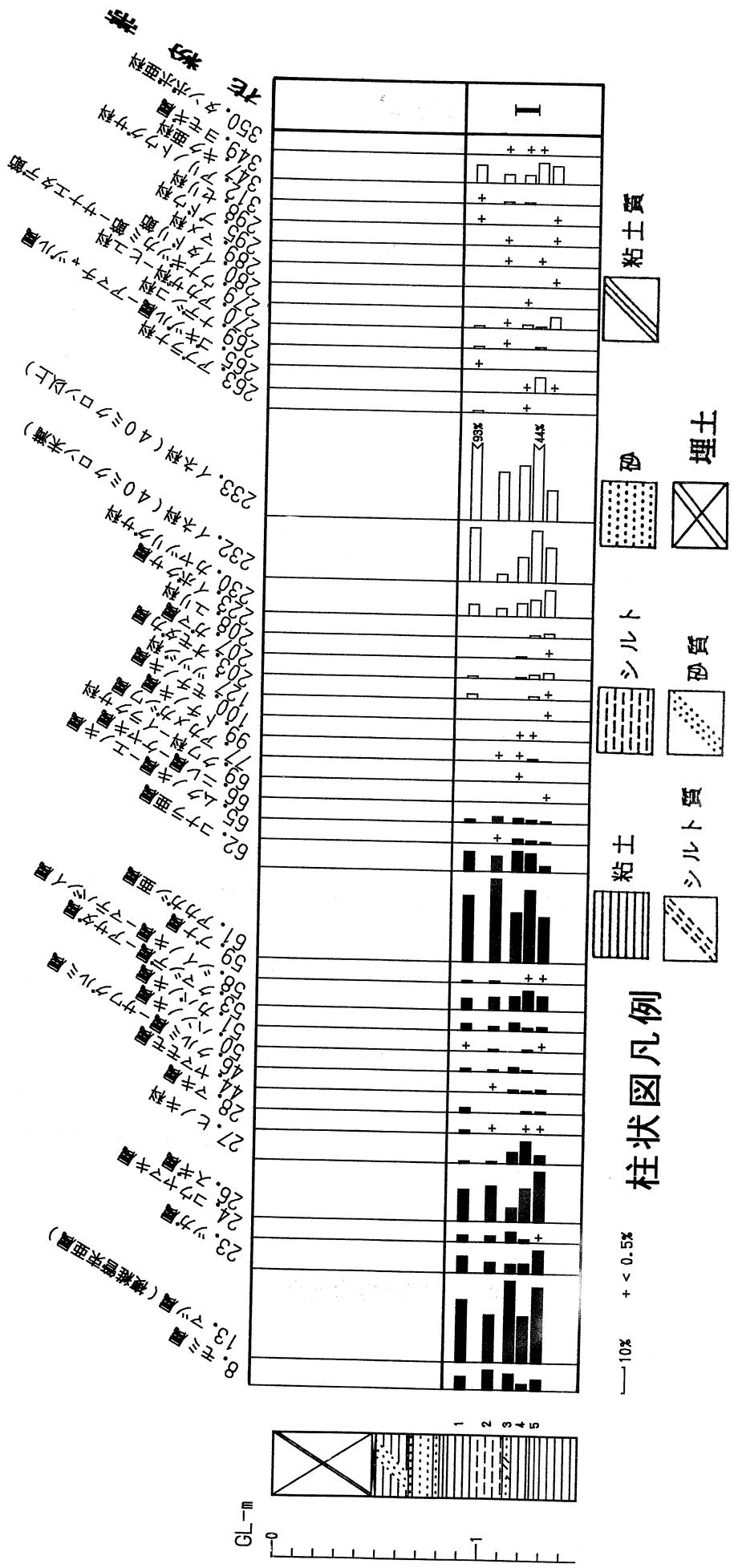


図2 中神田遺跡（2次）第1調査区北壁東の花粉ダイアグラム

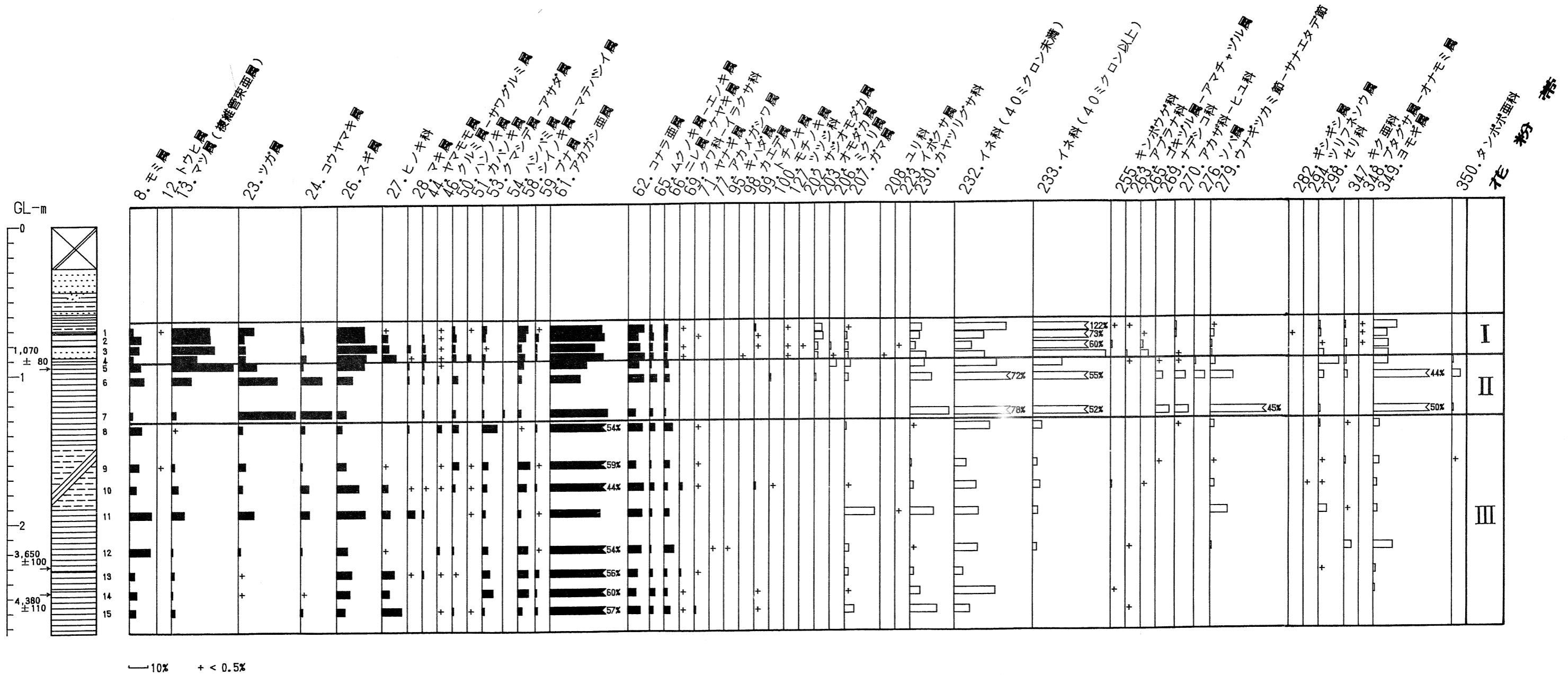


図3 中神田遺跡（2次）第2調査区北壁西の花粉ダイアグラム

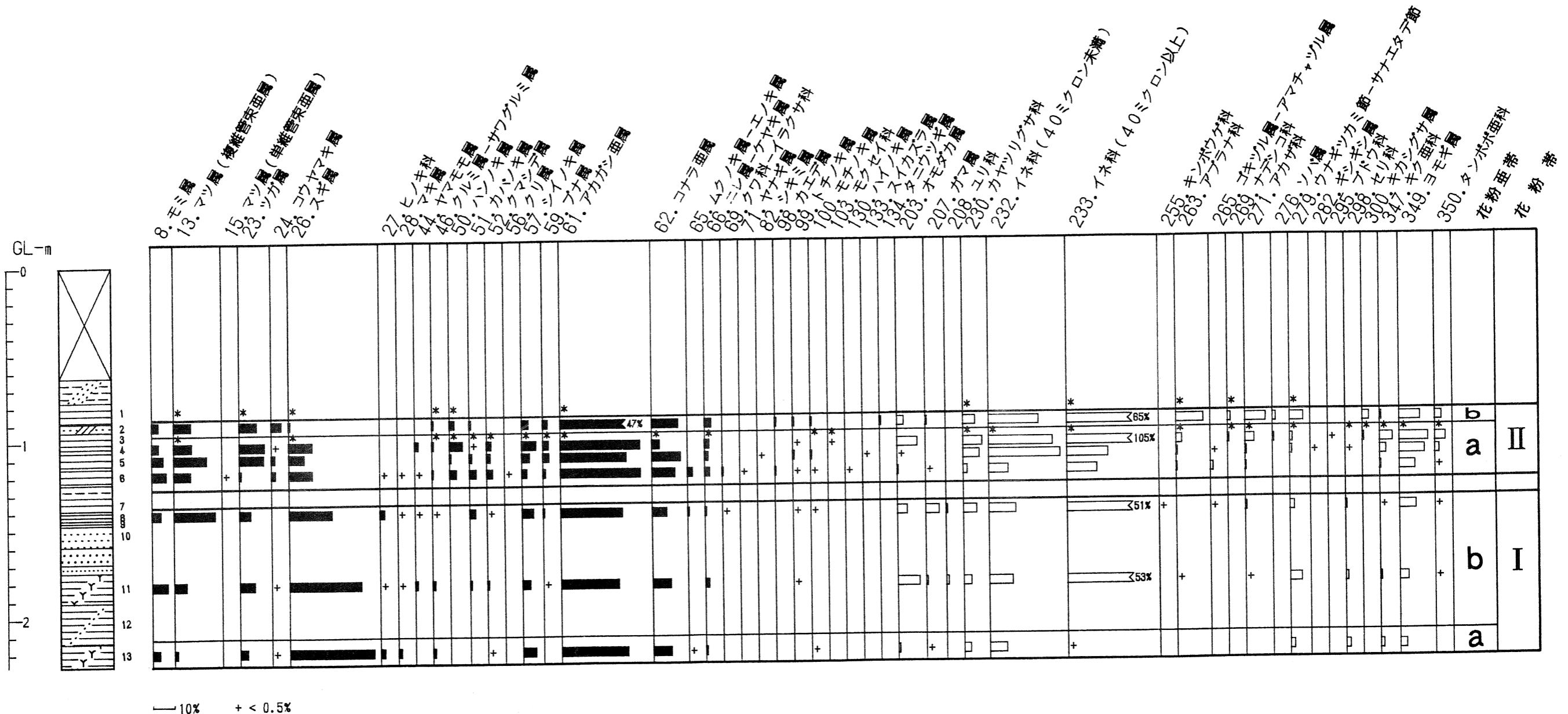


図4 中神田遺跡1次調査の花粉ダイアグラム

中神田遺跡Ⅱ

大阪府営寝屋川御幸西第2期住宅建て替え工事に伴う

埋蔵文化財調査概要報告書

1998. 3

編集 寝屋川市教育委員会

発行 寝屋川市錦町8-13

印刷 株式会社日東印刷

